

二〇一五年度  
兵庫教育大学大学院学位論文

芥川龍之介における中国女性へのまなざし

——「南京の基督」「支那遊記」「湖南の扇」を視座に——

教育内容・方法開発専攻  
文化表現系教育コース  
言語系教育分野（国語）  
M一四一六八E

劉 慧

目次

はじめに ..... 3

第一章 「南京の基督」に登場する宋金花と日本人旅行家 ..... 5

一 「南京の基督」をめぐる先行研究 ..... 5

二 「南京の基督」における宋金花の女性像 ..... 8

二―(一) 「南京の基督」の取材と宋金花 ..... 8

二―(二) 宋金花の「基督教」の信仰と儒教倫理 ..... 14

二―(三) 宋金花に起こった「奇蹟」 ..... 18

三 日本人旅行家と宋金花 ..... 20

第二章 「支那遊記」における近代中国の女性像 ..... 25

一 「支那遊記」をめぐる先行研究 ..... 25

二 「支那遊記」におけるジャーナリスティックな性格 ..... 27

三 芥川の目に映じた近代中国の現実 ..... 30

四 芥川が身近に接した性商品としての女 ..... 34

五 芥川が感じた反抗しようとする女 ..... 37

六 新しいタイプの近代中国女性に対する芥川の冷ややかな視線…………… 39

第三章 「湖南の扇」に登場する林大嬌と日本人旅行者…………… 46

一 「湖南の扇」をめぐる先行研究…………… 46

二 「僕」という日本人旅行者…………… 48

三 「湖南の扇」における林大嬌の女性像…………… 51

四 「僕」が林大嬌に興味を示さない理由…………… 58

第四章 芥川龍之介における近代中国女性像の変容…………… 64

おわりに…………… 70

資料 引用・参考文献一覧

## はじめに

本研究は、芥川龍之介における近代中国女性へのまなざしに注目し、芥川における近代中国女性像の変容を明らかにすることを目的とする。そのために芥川の中国旅行前に発表された「南京の基督」（一九二〇年七月）、中国旅行の収穫と言われる「支那遊記」（一九二一年八月〜一九二五年一月）と中国旅行を終えて約四年半後創作された中国旅行の土産と言われる「湖南の扇」を取り上げたい。

「南京の基督」と「湖南の扇」はそれぞれ近代中国の南京と湖南の長沙を舞台とし、近代中国を生きている女性を主人公としている。「支那遊記」は芥川の生涯に唯一の海外旅行を記録している紀行文であり、作中に散在する近代中国女性への描写も興味深い。三作を取り上げるもう一つの理由は、三作が日本人旅行者という存在を設け、日本人旅行者の立場から、近代中国女性を描いているということにある。

「南京の基督」の中には、作者芥川龍之介の分身を思わせる南部中国観光に来た「若い日本人旅行家」が登場させながら、宋金花の造形を推し進めている。「若い日本人旅行者」の「蒙を啓いてやるべきであらうか」という自問も、作者自身の思想の反映でもある。「支那遊記」の中では、芥川龍之介自身を指す、ジャーナリストの才能に富んだ新聞社海外特派員である「私」の目を通して、近代中国の情勢と近代中国を生きている女性の姿を素直に書き留めている。「湖南の扇」の中にも、湖南の長沙へ旅行に来た日本人旅行者「僕」を、芥川龍之介の分身だと思わせるような仕掛けがなされている。日本人旅行者「僕」が自分自身の旅行体験談のように、自分の目で確かめた近代化に巻き込まれざるを得ない湖南で生きている女性を語っている。

そのうえ、この三作の間に芥川文学ないし芥川自身に大きな影響を与えた約四ヶ月の中国旅行がある。三作の発表時期を見れば、三作により、中国旅行を境にした芥川における近代中国女性像の変容を考察するのも可能である。「南京の基督」は中国旅行前の女性像を、「支那遊記」は旅行中自己の目で確かめた女性像を、「湖南の扇」

は旅行を終えた後の女性像を描き出している作品としても読めると考えられる。

論述手順として、まず「南京の基督」を分析し、まだ中国の地に足を踏み入れていないうちに、創作した近代中国女性像を考察する。次は「支那遊記」に散在する女性についての描写に注目し、「支那遊記」に書かれている近代中国の女性像を纏める。更に中国旅行後創作した「湖南の扇」に描かれている女性像を分析する。このような論述により、芥川龍之介における近代中国女性像の変容を明らかに纏めてみたいと考えている。

## 凡例

★芥川龍之介のテキストは、『芥川龍之介全集』全八巻・別巻一（一九七一年三月～一九七九年四月、筑摩書房）を底本とする。また引用文中の傍線などは引用者によるものである。

★引用に際しては、原則として旧字体は新字体に改め、ルビ、脚注等は適宜省略した。

★「支那」という用語について、引用資料などで用いられたものは、そのままにしておく。

## 第一章 「南京の基督」に登場する宋金花と日本人旅行家

### 一 「南京の基督」をめぐる先行研究

「南京の基督」は『中央公論』第三十五年第七号（一九二〇年七月一日）に掲載された芥川龍之介の中国題材小説である。一九二一年三月に新潮社刊芥川の第五創作集『夜来の花』に収められた。

「南京の基督」のヒロインは、南京奇望街に住んで、貧しい家計を助けるために、毎晩その部屋に客を迎える一五歳の少女売春婦宋金花である。容貌は取り立てて言うほど美しいわけではないが、子供の時から母親に教えられた基督教信仰をずっと持ち続けることと深く関わるのか、極めて気立ての優しい少女である。ある秋の夜、南部中国観光に來た若い日本人旅行者と一夜を明かした。私娼の商売と信仰との間に矛盾を感じたのか、日本人旅行家は皮肉な口調で「さうしてこんな商売をしてゐるのかい」と問う。この問いに宋金花は晴れ晴れとした様子で「この商売をしなければ、阿父様も私も餓ゑ死をしてしまひますから」と答える。そして、「天国にいらつしやる基督様は、きつと私の心もちを汲みとつて下さると思ひますから」と基督への信頼を告白する。この娼婦であり同時に基督教徒である宋金花が、一ヶ月ほど前から悪性の極まった楊梅瘡を病む体となつた。彼女の部屋に遊びに來た同輩から、「あなたの病氣は御客から移つたのだから、早く誰かに移し返しておしまひなさいよ。さうすればきつと二三日中に、よくなつてしまふに違ひないわ」という助言をもらつても、彼女は健氣にも客に病を移さないように、客と一つの寢台に寝ないと決心する。そして、何時かどんな誘惑に陥るのかを心配し、「どうか私を御守り下さいまし」と基督に熱心に祈禱を捧げる。ある夜彼女の部屋に見慣れない外国人が來て大金を出して彼女と一夜を明かすことを要求した。彼女は何回も拒否したが、不思議にその外国人の顔が十字架上の受難の基督の顔に生き写しだったと氣付き、結局夢見心地でその外国人と一緒に寢台を共にした。翌朝意識が戻つ

て、その外国人に病気を移していたらと心が暗くなってきたが、一晩のうちに彼女の身体に起こった悪性の極まった楊梅瘡を癒したという「奇蹟」に驚き、その外国人を基督だと思い込んでしまう。翌年の春のある夜、彼女を再び訪れた日本人の旅行家は、彼女からその「奇蹟」を聞く。彼は宋金花の信じる基督が実は、基督教を信じる南京の私娼を一晚買い、その女がすやすや眠っている間に、そつと逃げた「英字新聞社の通信員だと称してゐる」George Murry」といふ「無頼な混血児」であることと、その無頼な混血児が「悪性の梅毒から、とうとう発狂してしまつたのは、事によるとこの女の病気が伝染したのかもしれない」ということを、彼女に告げるかどうか、「蒙を啓いてやるべきであらう」とかと自問する。

この作品が発表された直後、南部修太郎は、この作品を「小綺麗に小器用に纏め上げたFictionを書いて、気持ち好ささうに遊んでゐる。作者に心の動きが無い」作品に属するものであると批判する<sup>(1)</sup>。安倍能成は「作者の漢文素養や通を利用して美しく物語を織成したに過ぎない」と述べ、「この作は決して強い真実性を持つたものではない、しかも亦一個独立の小世界を創造したメルヘンでもない」と、作品の意図がはっきりしていない点を批判する<sup>(2)</sup>。久米正雄は「格を外さぬ文体の美しさ」、「全編を作す態度の一糸乱れない立派さ、所々を機知で救ふ気稟の閃めき」などと、作品の完成度についての賛辞を惜しまないが、「趣味ばかりで固めたメルヘンの領域へ後戻りしよう」とする作品で、「その裏にある作者の「心の動き」が、どうも真の意味での材料への食ひ入り方が、何物かの為に、沮害されてゐるやうに感ぜられてならない。」という批評をも加える<sup>(3)</sup>。このように、「南京の基督」を技巧にすぐれた、完成度の高い小説として肯定的に評価する点で、同時代評はほぼ一致している一方、総合的な評価は低いということも伺える。

時代につれて、それ以後の研究は異なつた角度と視点から行われた。芥川が自殺した後、宮本顕治は、「南京の基督」を「氏のロマンチズムに溢れている。私窩子の抱いているクリストの夢に——儂い夢に、氏は憐憫と愛撫をそそいでいる」と芥川が現実に目を背けた、エキゾチックな世界と、神秘的な奇蹟にロマンチズムを求

めるといふ作品であると評価する(7)。それに対して、宮坂覚は「果たしてロマンチズムだけで裁断できるだろうか」といふ議論を提起し、「日本旅行者を登場させることによって、〈メルヘン〉が中空から地上に引き摺り下ろされている」と指摘する(8)。三好行雄は「手慣れた技巧が、しかしうわすべりのない重さで、がっちりした小宇宙を造形するのである」と高く評価する(9)。三島由紀夫は「短編小説というジャンルを、大正九年にここまでもつてゆくことは他の誰にもできなかった。近代日本の急激な跛行的な発展の一つの頂点の文学的あらはれ」と絶賛する(10)。他方、「南京の基督」における芥川のキリスト教思想に注目する論も見られる。笹淵友一は「明らかにキリスト教の信仰や信徒を嘲る意図を持った作品」で、「キリスト教の冒瀆を意図した」と批判する(11)。宮坂覚は、芥川にはキリスト教を「「軽んずる為」「嘲る為」という目的意識のもとに書かれた作品はなかった」と笹淵友一に反論し、「青年時代の実存的求道、“聖なる愚人”(中略)が金花に翳りを落としている」ことを見逃してはいけないと述べ、「東洋的エトス」の視点を導入して肯定的に論じる(12)。更に、「南京の基督」に纏わる芥川の南部修太郎宛ての二通の書簡に注目し、それをめぐる論も見られる。三好行雄は「現に書かれている小説の脈絡に南部あての書簡を導入したとき、金花の生が耐えねばならぬ *Odious truth* の変容は決定的であ」り、二通の芥川書簡は「南部批評に触発された龍之介の強弁であ」り、芥川はこの書簡によって「もうひとつ、べつの小説を書いてみせたのである」と芥川書簡を説く(13)。笠井秋生は二通の芥川書簡を取り上げ、梅毒の症状をテキストに沿って分析し、「南京の基督」を梅毒固有の症状の絶妙の利用によって成立した作品であると三好行雄に反論する(14)。

以上、先行研究を纏めると、発表当初から今日に至るまで、「南京の基督」を芥川自身の宗教や人生の問題、古典趣味などを考える作品として決め付ける傾向が強い。これらの論によって、「南京の基督」にあるすべての謎が明らかになったわけではない。宋金花は近代中国を生きている女性であるという点に注目する論があまり見られないことも事実である。特に宋金花という人物そのものへの探究と評価が望まれるとも言える。一九二〇年



の時点で、まだ中国を訪れたことのない芥川は、芥川の分身だと思われる「若い日本人旅行家」の目を通して、近代中国女性にどのような認識を持って、宋金花を作り上げたのであろうか。「若い日本人旅行家」の背後に立つ芥川自身はどんな葛藤を潜めているのであろうかなどといった問題がまだ残されている。本章では、近代中国の女性像の視点から、宋金花にアプローチしてみたい。それに、宋金花の女性像を明らかにすることは、「南京の基督」から「支那遊記」を経て「湖南の扇」に至るまで、芥川が日本人旅行者の視点から作り上げた近代中国女性像がどのように変貌していたか、芥川自身の内面がどのように動いたかなどといった問題の究明においても、欠かせない観点だと考えられる。

## 二 「南京の基督」における宋金花の女性像

### 二―(一) 「南京の基督」の取材と宋金花

芥川作品には種本のあるものが非常に多いのは周知の事実である。芥川自身がこの作品の末尾に「本篇を草するに当たり、谷崎潤一郎氏作「秦淮の一夜」に負ふ所尠からず、附記して感謝の意を表す。」と書いている。「秦淮の夜」が「南京の基督」の構想や描写の一端を支えていると考えられるが、三好行雄と福井靖子の考察によると、「秦淮の夜」から借用したのは、「南京奇望街」や「秦淮」などの地名をはじめ、「古ぼけた壁紙」「部屋の隅々まで光が届かないランプ」「西瓜の種」などといった娼婦の部屋の状況や、「孔子廟」「飯館」「画舫」など風俗的知識などにすぎない<sup>(12)</sup>。主人公宋金花の設定など作品の中核を成すものは、芥川自身の独創であると考えられる。では、芥川はなぜ「南京奇望街」という舞台を設け、そして少女売春婦宋金花という人物をどのように作り上げたのだろうか。

一つの推測として、芥川は書籍から得た知識に基づき、宋金花を作り上げたということが挙げられる。芥川は半自伝的な作品である「大道寺信輔の半生」（『中央公論』一九二五年一月）において、「信輔は当然またあらゆるものを本の中に学んだ。少くとも本に負ふ所の全然ないものは一つもなかった。実際彼は人生を知る為には街頭の行人を眺めなかつた。寧ろ行人を眺める為には本の中の人生を知らうとした。それは或は人生を知るには迂遠の策だつたのかも知れなかつた。が、街頭の行人は、彼には只行人だつた。彼は彼等を知る為には、——彼等の愛を、彼等の憎悪を、彼等の虚栄心を知る為には本を読むより外はなかつた」と書き、芥川の人生と文学の關係を示す。書齋の文学者としての芥川は正真正銘の読書家である。「愛読書の印象」（『文章俱樂部』一九二〇年八月）には、「子供の時の愛読書は『西遊記』が第一である。これ等は今でも私の愛読書である。（中略）それから『水滸伝』も愛読書の一つである。これも今以て愛読してゐる。」という文がある。この文を読めば、芥川は小さい頃から、中国の古典、例えば『西遊記』『水滸伝』などを愛読したことが分かる。中国滞在の旧友斎藤貞吉宛ての書簡（一九一八年一月二〇日付け）には、「金瓶梅（明代）を始め痴婆子伝（清代）、紅杏伝（清代）、牡丹奇縁（『桃花影』の別名、明代）、燈蕊奇僧伝（『燈草和尚』の別名で、坊主と女との淫乱な物語、明代）、歎喜奇観（清代）などの淫書をよむとどうも支那人の開化した野蛮性が面白くなつて来る」（一〇）の内容は引用者による）と記し、かなり漢籍から中国女性のイメージを獲得し得ると言える。日本近代文学館刊行の『芥川蔵書目録』（<sup>13</sup>）によると、和漢書四六五点一八二二冊の内、漢籍は一八八点、一一七七冊あることがわかる。中には、八〇冊の『香艷叢書』（隋代から清代まで女性に纏わる物語集成）、三六冊の『唐代叢書』（唐代）、その小説の材料によく用いた一六巻の『聊齋志異』（清代志怪小説）などを所蔵している。吉田精一は「芥川文学の材源」において、芥川の一四〇余篇作品の中には、六二の作品に種本があるということを指摘している（<sup>14</sup>）。いわば、芥川は本から得た材料を土台にし、さらにそれを創作に活かして小説を組み立てたと言える。以上の考察によれば、読書家の芥川はそれらの和漢書を探し集め、中国女性のイメージを得たと考えられるだろう。小説

の中で中国女性を創作する際に、読書から得た中国女性のイメージをも手本にすることが想像しがたいことではないだろう。

では、近代以前の中国文学に出てくる女性たちは、一体どのようなイメージを持って描かれていたのであるか。中国文学における女性像と女性観を纏めた『中国文学の女性像』<sup>15</sup>の石川忠久「序」に、古代から近代までの中国女性像について次のように述べられている。

漢代に至って、儒教論理が確立すると、ここに、節義を最高の規範とする女性観が前面に押し出されてくる。『古列女伝』や歴代の史書の「列女伝」に表れる女性像は、儒教論理に基づき、情の否定の原理に生きる、類型化された姿である。「女戒める」や、後の『女論語』等の女訓書も、この基盤の上に生み出される。六朝に至って、志怪の世界では、背徳の女性を描くものも表れた。また、唐代の伝奇や変文の世界では、社会情勢の複勢多様化に伴う各層各種の女性が描き分けられるようになるが、儒教論理に殉ずる女性の顕彰や、仏教論理による勸戒性も色濃くうかがわれる。(中略)宋の戯文、明の擬話本、清の『紅樓夢』等に於いては、白話という表現形式の力を得て、女性像は深化し、情の世界が緻密に描かれるのであった。(中略)近現代文学における女性像、女性観は、西欧文化の流入のもと、婦人解放の動きと関わっている。自立を求める女性のあり方や、性差別の問題が主要なテーマとなり、女性からの女性観の表明も起ってくる。

右のように石川は、宋、明、清の中国女性についての描写が、「女性像は深化し、情の世界が緻密に描かれるのであった」という。前述の芥川の読書経験と蔵書から見れば、芥川が中国古典文学のうち、志怪小説と伝奇小説をかなり好んでいたと推測できる。右の引用文から、六朝の志怪小説には、背徳の女性が主に描き出され、唐代の伝奇小説に儒教論理に殉ずる女性の顕彰や、仏教論理による勸戒性も色濃く出てくることが分かる。女性の

描き方が変遷したものの、描かれる女性たちは基本的に儒教倫理に強く支配されていると感じられる。漢代において、儒教の倫理思想はすでに厳密な体系を成し、官学の位置を獲得した。それ以降儒教が中国封建社会構造の基本となり、女性の生き方も決して儒教倫理から外れることができない。儒教倫理によって作り上げられた中国の伝統的な社会通念によると、女性はおおやけの社会生活に加わることができない。男性が国家や社会運営の主役で、女性はただ補佐役に過ぎない存在であったため、儒教の三綱（君臣、父子、夫婦）の中では、夫婦関係について、女性は夫に従うという原則を作りながら、「三従四徳」（三従とは、未だ嫁がざるは父に従い、すでに嫁いでは夫に従い、夫に死なれたら子供に従うことである。四徳は婦徳、婦言、婦容、婦功を指す）などの掟を決め、女性を「従順」に育ててきた。後漢の曹大家が創作した『女誡』、唐代の伝宋尚官が編纂した『女論語』、侯莫陳邈妻鄭氏が書いた『女孝経』、明代仁孝文皇后が作った『内訓』、伝王節婦が編纂した『女範捷録』、清代の陸圻が創作した『新婦譜』などといった女性教育向けの本にも、女性を「従順」して育てるべきことを唱えている。背徳の女性、情に溺れる女性は、大抵儒教の道徳の基準で言えば、はなはだ風紀を乱す行動を取る女性として描かれ、最後悲惨な境遇に遭い、惨めな結末を遂げる。例えば、芥川が読んだことのあると断定できる小説『痴婆子伝』は、上官阿娜という背徳の女性を描いた作品である。儒教倫理から外れたやり方を選んだ上官阿娜は「夫不以我為室（夫は私を妻と認めず）、子不以我為母（子供も私を母と認めない）」（一）の内容は引用者による翻訳）という家族に許されない結末を得、仏門に入ってしまった<sup>16</sup>。よって、儒教倫理を守り、善良、従順かつ無反抗な態度は、儒教倫理に支配される社会を生きる伝統的な女性にある特色である。一九一〇年代の上海においても、またこの本を少女に対しての戒めとして出版されたことから、知識人をはじめ、多くの国民が持っていた女性についての儒教倫理の固さを想像できる。中国古典に親しむ芥川自身は、中国女性を創作する際に、中国古典から得た女性のイメージに影響されるのは、無理がないと考えられる。では、当時の中国を支配する儒教倫理という視点から、宋金花の場合は、それに当て嵌まるのであろうかを検討してみよう。

まず、「南京の基督」における宋金花についての描写を押さえよう。

少女は名を宋金花と云つて、貧しい家計を助ける為に、夜々その部屋に客を迎へる、当年十五歳の私窩子であつた。(中略)彼女は朋輩の売笑婦と違つて、嘘もつかなければ我儘も張らず、夜毎に愉快さうな微笑を浮べて、この陰鬱な部屋を訪れる、さまざまな客と戯れてゐた。さうして彼等の払つて行く金が、稀に約束の額より多かつた時は、たつた一人の父親を、一杯でも余計好きな酒に飽かせてやる事を楽しみにしてゐた。

母親に死なれた金花は貧しい家計を助けるために、身売りまでして家族のために生きてゐる従順な少女である。基督に祈祷を捧げる時に、「私は阿父様を養ふ為に、賤しい商売を致して居ります。しかし私の商売は、私一人を汚す外には、誰にも迷惑はかけて居りません」と金花が言う。そこには善良で、身売りまでして腰の立たない父を養う「孝行」を懸命にやつてゐる少女像が浮き上がってくる。

ここで注目したいのは、「私は阿父様を養ふ為に」という一句である。彼女の態度は、まさに儒教の「三従四徳」の反映である。封建的な儒教思想は彼女の心までに滲みこんでいたということも読み取れると思う。前述のように、社会通念と道徳基準に従い、儒教倫理を固く守り、儒教倫理の枠に生きてゐる女性だけが、「正統の好い」女だと認められる。売春婦や妓女などは、すでに儒教倫理から外れてゐる生活を送るので、正道に背く「淫女」として、軽蔑と嘲笑の対象となる。「私の商売は、私一人を汚す外には、誰にも迷惑はかけて居りません」という金花の心理を叙述する文を見れば、金花自身にこの商売によつて自らが汚されてゐるといふ意識を持つてゐると読み取れるだろう。父親も亡くなつたとしたら、封建的な儒教倫理に飲み込まれた金花は、自己を汚すより飢え死を選び、自ら命を絶つかもしれない。父親がまだ生きてゐるからこそ、彼女は父を養うために、自ら賤しい「職業」にも甘んじるのである。言い換えれば、金花の人間構造の主要部分を底深く支配してゐるのは、儒

教倫理による「孝道」ではないだろうか。

儒教の三綱の一つである「父子」は「孝道」の支えとなっている。古い時代から近代中国に至るまで、孝道は鼓吹し続けられるのである。一九一八年五月には北京地方紙『晨报』社会版面に「孝子が股肉を割いて親の病を治す（孝子割股療親）」、「賢婦がわが肉を割いて姑に食べさせる（賢婦割肉奉姑）」、「良妻が腕肉を割いて夫の病を治す（賢婦割臂療夫）」などの食人のセンセーショナルなニュースが立て続けに報道されていた<sup>(17)</sup>。孝行息子が親のため、孝行賢婦が姑のため、良妻が夫のためにわが肉を切り落として食べさせたことは、儒教社会の人間観や親子の情を背景とする倫理行動で、すなわち「孝」の実践である。マスメディアがそれらの食人肉の行為を「孝」と「賢」という儒教的価値観から賞賛する衝撃的な記事から、当時中国で孝道を鼓吹していた雰囲気想像できるだろう。儒教倫理における「孝行」について、下見隆雄は、「孝行」を「子が、親から離脱して独立せず、個の人間存在としての主体的自立の意志を持たず、従順にして、終身親を慕って親の意を迎え入れる行為」であると捉える<sup>(18)</sup>。身売りまでして父を養うという金花の行為は、自己の肉を親に食わせる行為と同様、「孝道」における親への服従と奉仕という観念から生まれてくる。身売りまでして父を養う金花は、自己とこの個の主張を放棄し、父親に奉仕している。「孝道」の視点から評価すると、金花は孝行娘として、儒教倫理に当て嵌まる女と言える一方、「淫女」として儒教倫理に許されない生き方を選んでいる。金花自身が孕んでいる矛盾は、当時中国社会を支配している儒教倫理の虚偽性を暴露するとも考えられる。「私は阿父様を養ふ為に、賤しい商売を致して居ります。しかし私の商売は、私一人を汚す外には、誰にも迷惑はかけて居りません」だから、「必ず天国に行かれる」と信じている単純な一五歳の少女は、どう見ても、善良且つ従順、「親孝行」を貫くために、やむを得ず「淫女」という儒教倫理に許されない生き方を選んでいる。つまり、伝統的な中国文学に出てくる女性の描写と同じく、宋金花も人生の方向性に個人としての深遠な反逆精神が欠けている。これを踏み込んで言うならば、宋金花を造形する際に、芥川は古典書籍の中から得た儒教倫理の枠組みに生きている中国女

性のステレオタイプを打ち破ろうとしていなかったと考えられるだろう。

## 二―(二) 宋金花の「基督教」の信仰と儒教倫理

前述のように、金花は儒教倫理という束縛から脱出できない存在である。これまでの論者と違い、筆者が基督教の信仰は、金花にとって一体どんなものなのか、という金花の信仰を論じる際に避けて通ることのできない問題に惹かれている。テキストに沿いながら、この問題を解釈してみよう。

「五つの時に洗礼を受けました」とあることから、外来宗教である基督教へ入信は、金花自身の意思によることとがないことだと推定できる。作者芥川は、「かう云ふ金花の行状は、(中略)しかしまだその他に何か理由があるとしたら、それは金花が子供の時から、壁の上の十字架が示す通り、歿くなった母親に教へられた、羅馬加特力教の信仰をずっと持ち続けてゐるからであつた」という。作者は金花の母親がいつ亡くなったのか、基督教について、金花が母親に何年間教え続けられたのか、説明していないが、金花の年齢から見れば、彼女の信教と祈祷などは、母親の模倣をしているに過ぎない。こういう作中事実から鷲只雄は、金花の信仰が罪を許し、弱さを認め、愛をもって受け入れてくる「母の宗教」のイメージが濃いと論じた<sup>19</sup>が、当時の中国で「母の宗教」はどんなイメージを持たれるだろうか。

テキストによると、金花の基督教信仰は、亡くなった母親に子供の時から教えられたものである。当時の中国社会の現実を考慮すれば、生涯に亘って「三綱」と「三従四徳」という儒教倫理に支配されつつあつた金花の母親像を推測できるだろう。金花の母親がどんな一生を送ったかは作中に書かれていないが、金花の母親は基督教信者になり、基督に救われるかどうかを別にして、結局「従順」な一生を送ることが伺えるだろう。金花は、「歿くなった母親に教へられた」から、基督教の神を信じている。彼女にとっては、基督教が外来の宗教であること

などは意識がなく、周囲の非基督教との矛盾もない。母親が残した教えだからこそ信じている。このように考えると、金花は母親から基督教信仰を継いできたというより、基督教と儒教に共通している「従順」を継いできたと言ったほうが妥当であろう。

作中現実に注目しよう。若い日本人の旅行家に、基督教信仰者でありながら、なぜ売春婦という「職業」に甘んじると、皮肉な言い方で指摘される時、金花は「天国にいらつしやる基督様は、きつと私の心もちを汲みとつて下さると思ひますから。——それでなければ基督様は姚家巷の警察署の御役人も同じ事ですもの」と答える。

ここで注目したいことは「警察署の御役人」という言葉である。中国において、「辛亥革命」までは、封建王朝時代だから、警察が存在していなかった。「警察」というものは、一九一二年近代国家としての中華民国が建国してから、初めてできたものである。よって、ここでの「姚家巷の警察署の御役人」は紛れもなく、近代の国家権力或いは制度の象徴である。当時の中国では、金花のような下積みの人、国家権力と暴力機関に従わなければならない。警察が国民を守るというイメージと違い、金花は警察に対して、警察に守られるどころか、警察に虐められるかもしれないという悪印象を持っている。売春までしないと生きられない金花は、「姚家巷の警察署の御役人」を「天国にいらつしやる基督様」に対比させる。ここで国家暴力機関や制度への不満や、蔑視或いは憤怒を表現しようとする言葉は、一切使われていないが、自分の生きる現実への不信或いは反発が、現実世界から、宗教的且つ自分を救えるものへと向かわせている。したがって、金花はただ現実の権力機関に従い、「たとひ餓死をしても、（中略）御客と一つ寝台に寝ないやうに、心がけねばなるまいと存じますから。怨みもない他人を不仕合せに致すことになりませんから」という善良さを持ちながら、信じられる基督に救いを求めるだけである。

『宗教哲学序論・宗教哲学』において、宗教信仰について、波多野精一は「宗教において主体（自我）は神聖なる実在者、神との関係交渉に入る。己を虚しく一切をこの神聖なるものに打任せそれがなすままに従う、——



それが信仰である。(中略) 信仰は神聖全能なる神との交りにおいてそれにふさわしき人間の態度、純粹なる服従と信頼との態度の意に解された」と述べている。宗教の賞罰制度を設定する働きについて、「人間は自己の善き行為によって従って自己の功績によって、功罪を比較してそれに応じて賞罰を分配する裁判者たる神の手より永遠の生を賞として与えるべく努力せねばならぬ」と述べ、宗教の重心は「道徳的社会的文化的作動に置かれた」という(20)。

テキストによれば、金花の考えでは、「たつた一人の父親を、一杯でも余計好きな酒に飽かせてやる事を楽しみにしてゐた」という孝行も、「歿くなつた母親に」子供の時から教えられた基督教を忘れずと信じることも、客に病を移さないように「御客と一つ寝台に寝ない」という決心も、彼女の善行である。基督を信頼し、基督に純粹に服従している金花は、基督から自己の善行(功績)に相応しい賞をもらい、基督に救われるという信仰を抱えている。この点において、基督教教義は、儒教倫理の儒教倫理に従えば、幸せに導かれるというところと共通していると考えられるだろう。つまり、三位一体の神に従い、造物主に従い、神の審判に従うという基督教義に含まれる「従順」という思想には、当時中国社会を支配する儒教倫理と共通しているものがあると思われる。その時代を生きている金花を、純粹な基督教信者だと捉えるというのは、正しくないのではないだろうか。儒教倫理に従っても、悲惨な生活しか送れない現実から、「孝行娘」と「売春婦」との心理的矛盾から、自身身を救うために、母親に教えられた基督教を、自分自身を救うものとして、捉えただけだったと考えても過言ではないだろう。

もう一つ指摘したいのは、この物語が、ある秋の夜、金花の部屋の中で始まり、翌年の春の夜、その部屋の中で終わるという点である。金花が外に出ることはなく、舞台は金花の部屋という空間に限定されている。部屋に限定されるということが、金花は、儒教倫理に支配される近代中国で、社会生活から排除され、儒教の束縛から逃げられない、近代化の波にも巻き込まれつつあった中国社会に取り残される存在だと暗示しているのではない

かと思われる。だから、どんな宗教であろうが、救いを求められるなら、金花にとっては、別に区別のないものである。言い換えれば、金花の信仰は「基督様」より、「自分自身を救える物」に偏しており、そういう意味では、金花が基督教の信者としての色合いは薄いと言わざるを得ないだろう。

金花の部屋に入ってきた外国人はどこかで会った覚えがあるようで、金花がそれを思い出そうとする場面を見よう。

この間肥った奥さんと一しよに、画舫に乗つてゐた人かしら。いやいや、あの人は髪の色が、もつとずつと赤かつた。では秦淮の孔子様の廟へ、写真機を向けてゐた人かも知れない。しかしあの人はこの御客より、年をとつてゐたやうな心もちがする。さうさう、何時か利涉橋の側の飯館の前に、人だかりがしてゐると思つたら、丁度この御客によく似た人が、太い籐の杖を振り上げて、人力車夫の背中を打つてゐたつけ。事によると、――が、どうもあの人の眼は、もつと瞳が青かつたやうだ。

金花が「外国人」に対して持つてゐるイメージが引用文に書かれている。一人目の外国人は、「肥つた奥さん」と一緒で、赤い髪の毛で、二人目は、写真機に向けている姿で、三人目は、籐の杖で人力車夫の背中を打つてゐるという動作で、金銭と権利を利用して威張つて金花のような生死の間に苦しんでいる貧しい人々を圧迫する外国人像として、金花は記憶している。顔を識別するのではなく、髪の毛や動作などから、彼女は外国人を識別するということが読み取れる。即ち、金花にとって、「外国人」というのは、自分自身と違い、朦朧としていて曖昧な集団的な概念である。彼女には、外国人の顔を一一識別しようとする能力或いは意識がないということを通じて、作者芥川は金花が「無頼な混血児」を「耶蘇基督」だと思ひ込んだことを合理化できると考えられる一方、仮に「耶蘇基督」が目の前に現れても、金花はそれと認識で

きない人物として造形されているとも考えられる。

二―(三) 宋金花に起こった「奇蹟」

金花が一夜南京に降りた基督が彼女の病を治したという不思議な話を日本人の旅行家に話した後、旅行家と次のようなやり取りがある。

その話を聞きながら、若い日本人旅行者は、こんな事を独り考へてゐる。――

「(略)しかしこの女は今になつても、ああ云ふ無頼な混血児を耶蘇基督だと思つてゐる。おれは一体この女の為に、蒙を啓いてやるべきであらうか。それとも黙つて永久に、昔の西洋の伝説のやうな夢を見させて金花の話が終わつた時、彼は思ひ出したやうに燐寸を擦つて、匂の高い葉巻をふかし出した。さうしてわざと熱心さうに、こんな窮した質問をした。

「さうかい。それは不思議だな。だが、――だがお前は、その後一度も煩はないかい。」  
金花は西瓜の種を嚙りながら、晴れ晴れと顔を輝かせて、少しもためらわずに返事をした。

引用文の文脈から、金花は「基督」に出会い、奇蹟的に梅毒が治つたという話に対して、作者の分身だと思われる日本人の旅行家は、懐疑的な考えを持つてゐることが読み取れる。金花の楊梅が完治したのか、潜伏してゐるのかを巡り、意見が分かれている。三好行雄は、「無頼漢のリアリズムは夢のロマンティズムをほとんど褪せさせていない。夢の残照が消えぬかぎり、読者は、病いの癒えた金花の奇蹟を「事実」として読みとるよりほかがないのだ」と述べ、「やや不鮮明な構図の内側にやがて、もうひとつの「南京の基督」を胚胎することにな

る、芥川龍之介自身が小説の終わった地点で、もうひとつの小説を書いてみせた」と、金花の病気が完治した<sup>(21)</sup>と読む。笠井秋生は、金花の病気は潜伏期による治癒に過ぎず、作者はこれを意識し、金花の信仰は永久的であり、「南京の基督」のモチーフは、「懐かしいばかりの人間の優しさ」にあると主張する<sup>(22)</sup>。金花の楊梅が完治したのか潜伏しているのかに対しての解釈は、この作品のテーマの解説に関わるのであろうが、ここで論じたいのは、悪性を極める梅毒が完治した場合、潜伏している場合、金花にとっては、それぞれどんな意味を持つかということである。

「この商売をしなければ、阿父様も私も餓え死をしましてはみますから」と言い、金花は父親を養いながら、生きていくには、「この商売」をしなければならぬと告白する。「この商売」は自分の身体を、性的な機能を使用してお客に消費されている。患った楊梅瘡は、商品としての彼女の欠陥だとも言える。その時、父親のために病を隠して商売を続けるのか、客に病を移さないように商売を断念するのか。「私どもの仕合せの為に、怨みもない他人を不仕合せに致す事になりますから」と考え、金花は欠陥のある商品として商売を続けているが、客に病気を移さないように、客と一つの寝台に寝るのを拒否する。「又時々彼女の部屋へ、なじみの客が遊びに来て、一しよに煙草でも吸ひ合ふ外に、決して客の意に従わなかつた」から、客は「彼女の部屋には、おひおひ遊びに来ないやうになつた」と同時に「又彼女の家計も、一日毎に苦しくなつて行つた。これについて、個人より多くの人々の幸せに貢献しようということであろうと高橋博史は指摘する<sup>(23)</sup>が、水洞幸夫は、彼女が粗悪品の出荷を思い止まり、市場に対して商品としての倫理を保つたということになると主張する<sup>(24)</sup>。前述のように、客に病を移さないように「御客と一つ寝台に寝ない」という決心は、金花が信じている基督教の善行主義による善行である。基督を信頼し、基督に純粹に服従している金花は、基督から自己の善行（功績）に相応しい賞をもらい、基督様に救われるという信仰を抱えている。水洞幸夫の論を一步進めて言えば、彼女は性的な肉体を客に

閉ざすことによつて基督様の教えに服従して精神的な純潔を守る。「御客と一つ寝台に寝ない」ということも、基督みたいな存在に救われる為に、基督に捧げる代償でもある。こういう前提を前に押して「奇蹟」の起こる可能性を築き上げる。

楊梅瘡が完治したとしたら、テキストに明示されるように、彼女の肉体は健全な商品に戻り、一人の父親を背負つて、また生きるために「淫女」として商売を続ける。「奇蹟」の正体が楊梅瘡の潜伏期による見せかけの治癒だとしたら、彼女の身体は梅毒に蝕まれつつ、いつかまた楊梅瘡が再発する。楊梅瘡の再発する身体そのものが、証拠となり、金花はずつと信じ続ける基督様に裏切られることを発見するはずである。その時、金花の「信仰」も瓦解するはずである。ここで指摘したいのは、楊梅瘡が完治したにしても、潜伏しているにしても、金花の動きに変わりがないということである。その変わりが無いものは、儒教倫理に支配された近代中国で、金花が儒教倫理に掲げられる「孝行娘」でありながらも、儒教倫理の道德基準に外れた「少女売春婦」でもあるということである。賤しい商売をやり続けながら、「基督様」みたいな存在に「孝行娘」と「少女売春婦」との矛盾からの救済を求めながら生きて行くのは、動乱する近代中国で、金花にとつての変えられない人生である。「奇蹟」が金花の夢だけの中で起こるといふより、むしろ、儒教倫理に支配されつつあったものの、近代化にも巻き込まれ動乱する近代中国で金花のような下積みの人々に「奇蹟」が起こりようもないと考えられる。言い換えれば、当時の中国で、宋金花を救う「基督様」のようなものはどこにもいない。宋金花に起こった「奇蹟」は作者芥川の憐れみによる架空のものである。

### 三 日本人旅行家と宋金花

「この女は今になつても、ああ云ふ無頼な混血児を耶蘇基督だと思つてゐる。おれは一体この女の為に、蒙を

啓いてやるべきであらうか。それとも黙つて永久に、昔の西洋の伝説のやうな夢を見させて置くべきだらうか」という自分を神の位置において、苦界で必死に生きる一五歳の少女の運命を高めから鳥瞰する「若い日本人旅行家」の言動に対して、南部修太郎は「作品から心にアピールする何物かを得ようなどは私は思はない。(中略)この作者独自の芸術的陶醉を読者に感じさせながら手際よく書き上げて見せてゐる」と非難する(25)。作者の芥川は南部修太郎宛書簡(一九二〇年七月一五日付け)に次のように反駁する。

僕等作家が人生から odious truth を擲んだ場合その曝露に躊躇する気もちはあの日本の旅行者が悩んでゐる心もちと同じではないか君自身さう云ふ心もちを感じる程残酷な人生に對した事はないのか君自身無数の金花たちを君の周囲に見た覚えはないのかさうして彼等の幻を破る事が反つて彼等を不幸にする苦痛を嘗めることはないのか

この書簡の内容は、日本人旅行家が取つた金花に對しての態度についての解釈、または作品のテーマに関わる重要な参考物である。芥川によると、「蒙を啓いてやるべきであらうか」という躊躇いの理由は、「彼等の幻を破る事」により、無数の金花のような人を不幸にする苦痛にあると考えられるが、ここで「不幸」という言葉の捉え方により、違う方向から作品のテーマを読み取る可能性が生まれてくる。金花にとつて、「幸」はどんなものかを考えよう。前述の金花像についての分析により、儒教倫理という一元思想に支配される近代中国を生きている金花は、身売りまでしなくても(淫女でなくても)、父親を養う孝行がやれる孝行娘として、生活を送りたといと推測できるだろう。言い換えれば、儒教倫理においての「淫女」と「孝行娘」という矛盾の極端から、「基督様」みたいな、人を救う力の持ち主に解放されることこそが、金花なりの「幸」である。こういう「幸」が実現できないとすれば、基督により病が完治したかどうか、基督だと思ひ込んだ人の正体は無頼漢であるかどうか、

日本人旅行家に事実を教えてもらうかどうかを別にして、作中に書かれているように、金花の「不幸」がそのまま続いているのである。

最後に日本人旅行家は「さうかい。それは不思議だな。だが、——だがお前は、その後一度も煩はないかい」と「わざと熱心さうに、こんな窮した質問をし」た。「熱心さうに」「窮した質問」といった表現から、偽られた熱意で、すでに知りたいという欲望を欠いた質問をしたという日本人旅行家像を想定できるだろう。どんな答えを聞いても、金花の「不幸」を変えることのできない旅行者を黙らせることを通じて、作者芥川は、金花だけではなく、自分自身をも「昔の西洋の伝説のやうな夢を見させて置く」ということができる。

つまるところ、「南京の基督」の中に、儒教倫理の「孝行」に束縛され、孝行を施すために、儒教倫理に背く生き方を取り、性の商品となり消費され、「基督様」みたいな存在に救済を願う少女像が浮かび上がってくる。作者芥川の分身だと思われる日本人の旅行家は、最後に少女に事実を告げるかどうかを躊躇い、人生への懷疑を覚えてくる。近代中国を生きている少女売春婦の造形を通じて、芥川龍之介は、人生という課題において、自身を抱えている人生・運命への懷疑を表しているという「南京の基督」の読みに辿り着くことができる。一九二〇年前後、侵略されつつあった中国では、もはや近代的思潮も掲げられたが、まだ儒教倫理に強く縛られている社会が戦乱で悪化していく。中国の地にまだ足を踏み込んでいない作者芥川は、「南京の基督」において、善良且つ従順的で、人生の方向性に個人としての深遠な反逆精神が欠けている中国近代以前の文学に描かれる中国女性のステレオタイプのな宋金花を、儒教倫理に強く縛られ、悪化していく社会状況に置いて造形している。続いて、芥川が中国を旅行してから書かれた「支那遊記」には、どのような中国女性が描かれているのかを、第二章で検討してみよう。

- (1) 南部修太郎「最近の創作を読む(六)」(初出は一九二〇年七月一日の「東京日日新聞」である、引用は関口安義編『芥川龍之介研究資料集成』第一巻(日本図書センター、一九九三年九月二五日)による)。
- (2) 安倍能成「七月雑誌を見て(六)」——芥川君の『南京の基督』臨川氏の聴くべき警告(初出は一九二〇年七月一三日の「読売新聞」である、引用の出典は注(1)に同じ)。
- (3) 久米正雄「続七月の文壇(二)」——後戻りをした芥川氏と、熱さましの正宗氏——(初出は一九二〇年七月一四日の「時事新報」である、引用の出典は注(1)に同じ)。
- (4) 宮本顕治「敗北」の文学——芥川龍之介氏の文学について——(初出は一九二九年八月号の「改造」で、引用は三好達治他編『昭和文学全集』第三三巻『評論随想集I』(小学館、一九八九年一〇月)による)。
- (5) 宮坂覚「南京の基督」論(『文芸と思想』、一九七六年二月号)。
- (6) 三好行雄「作品解説」(『杜子春 南京の基督』角川文庫、一九六八年一〇月)。
- (7) 三島由紀夫「手巾」『南京の基督』ほか(芥川龍之介『南京の基督』の「解説」欄に収録。角川文庫、一九五六年九月)。
- (8) 笹淵友一「芥川龍之介のキリスト教思想」(『解釈と鑑賞』第二三巻第八号、一九五八年八月)。
- (9) 注(5)に同じ。
- (10) 三好行雄「地底に潜むもの——『南京の基督』前後——」(初出は一九七一年一月の『国語と国文学』で、原題は「『南京の基督』に潜むもの」である。引用は『芥川龍之介論』(筑摩書房、一九八六年二月)に収録され、「地底に潜むもの——『南京の基督』前後——」と改題したものによる)。
- (11) 笠井秋生「『南京の基督』——二通の芥川書簡をめぐる——」(『芥川龍之介作品研究』、双文社、一九九三年五月)。
- (12) 三好行雄は前掲論文(注10)では、谷崎潤一郎の「秦淮の夜」と「南京の基督」にある娼婦の部屋について



ての描写を取り上げ、「潤一郎に借りた細部を手慣れた手法で象嵌しながら、娼婦の部屋の陰鬱な雰囲気をあざやかに再現してみせる。そして、その荒涼たる風景のなかに、ローマン・カトリックを信じる——というより、ほとんどエイス・キリストを愛している——可憐な少女を点出した」のは、芥川龍之介の独創であると指摘する。福井靖子は「『南京の基督』についての一考察」（『国文白百合』、一九七九年三月）において、三好行雄と同じく「秦淮の夜」から借りてきた小道具について考察する。

(13) 『芥川龍之介文庫目録』（日本近代文学館、一九七七年七月）。

(14) 吉田精一「芥川文学の材源」（富田仁編『比較文学研究 芥川龍之介』、朝日出版社、一九七八年一月）。

(15) 石川忠久編『中国文学女性像』（汲古書院、一九八二年三月）。

(16) 芙蓉主人『新痴婆子伝』（上海新新小説社、一九一〇年）。

(17) 藤井省三『魯迅——東アジアを生きる文学』（岩波書店、二〇一一年三月）。

(18) 下見隆雄『孝と母性のメカニズム 中国女性史の視座』（研文書店出版部、一九九七年九月二五日）。

(19) 鷺只雄「『南京の基督』新考——芥川龍之介と志賀直哉——」（『文学』第五一卷第八号、一九八三年八月号）。

(20) 波多野精一『宗教哲学序論・宗教哲学』（岩波書店、二〇一二年九月）。

(21) 注（10）に同じ。

(22) 注（11）に同じ。

(23) 高橋博史『芥川龍之介の達成と模索——「芋粥」から「六の宮の姫君」まで』（至文堂、一九九七年五月）。

(24) 水洞幸夫「芥川龍之介「南京の基督」試論——金花の身体、「旅行家」の身体——」（『金沢学院大学文学部紀要』第六集、二〇〇一年）。

(25) 注（1）に同じ。

## 第二章 「支那游記」における近代中国の女性像

### 一 「支那游記」をめぐる先行研究

芥川龍之介は大阪毎日新聞社に派遣され、一九二一年三月三〇日（芥川を乗せた築後丸が上海に入港した日）から同年七月一七日（下関港に着いた日<sup>1)</sup>）までの約四ヶ月間、大阪毎日新聞社の海外視察員として、上海、南京、九江、漢口、長沙、洛陽、北京、大同、天津などを訪れた。帰国した芥川は、中国旅行の紀行文、旅行者として見つめていた揺れ動く近代中国を再現する「支那游記」を執筆した。そのうち「上海游記」（全二一回）は、一九二一年八月一七日から同年九月一二日にかけて、「江南游記」（全二九回）は一九二二年一月一日から同年二月一三日にかけて『大阪毎日新聞』に連載され、二年の時を経て「長江游記」が一九二四年九月に雑誌『女性』に、「北京日記抄」が一九二五年六月に『改造』に掲載された。一九二五年一月に改造社は、それらの紀行文に「雑信一束」を付し、「支那游記」と題する単行本を刊行した。

「支那游記」は日本の芥川研究ではほぼ無視され、中国では多くの場合中国蔑視論のテキストと見られてきた<sup>2)</sup>。祝振媛は「『支那游記』」において、芥川が「中国の貧困、遅れの「醜い」ものを多く網羅して、それを興味深く嘲けつたり、諷刺したり」することを通して、「当時の中国を徹底的に否定」したものと主張し、芥川の「狭い民族優越感と中国に対する差別意識」を猛烈に批判し、「民族優越感と中国に対する差別意識はその時代の多くの知識人の限界」であると分析する<sup>3)</sup>。時代が進み芥川文学の研究も深化するにつれて、「支那游記」への否定論がすでに成り立たない兆しも見えるようになる。関口安義は、「大陸の自然を肉眼で見、何人かのすぐれた中国人と会見し、激動する国の素顔に触れたことは、以後の芥川の文学に大きな影響を与えている」と「支那游記」の意味を包括的に捉える<sup>4)</sup>。芥川が中国のことを書きながら、日本について考えているという「支那游記」

への新たなアプローチにおいて、中華書局版『中国游记』の訳者の秦剛は、「旅行中芥川龍之介が自己を相対化する意識」を読み取り、「支那游记」を「中国という他者の鏡像に映った日本が描出されたテキストとしても読め」、「自分の立場に無自覚的に甘んじることなく、他者の鏡に映る自分像を直視し、またそれを読者に伝える意識が「支那游记」では働いている」と分析する<sup>(5)</sup>。「支那游记」を異言語という文化的枠組みに置き、鈴木暁世は作中に出てきた中国語に焦点を当て、訪中前後の作品を取り上げ、異言語の描写を分析し、中国旅行が「後に書かれた作品の異言語をめぐる描写に影響を及ぼした」と中国旅行を境に生じた、芥川文学の変貌を指摘する<sup>(6)</sup>。更に、張蕾は『芥川龍之介と中国 受容と変容の軌跡』という著書において、芥川の中国旅行の動機から、旅行の成立経緯と内容、旅行の意味（作品の面、思想の面、健康の面、作風の面）、「支那游记」の創作まで、細かく系統的に論じる<sup>(7)</sup>。

以上取り上げた論は現在の研究者が「支那游记」を考察する場合の代表的な見解である。管見の限りでは、「支那游记」の芥川文学における位置付けや、芥川の作家としての人生への影響を巨視的に語る論が多いが、関口安義のような「支那游记」の肯定論派は、概ね芥川の中国古典への趣味を強調し、芥川が「支那游记」で中国の貧困、遅れの「醜い」ものを多く網羅したのは、芥川が「この国に関心を持ち、この国の民衆に目を注ぐが故の苦言」を呈するためであったと主張する<sup>(8)</sup>。祝振媛のような「支那游记」の否定論派の「支那游记」論に、論者は当時の中国に起こった歴史事実から目を逸らそうとする傾向が強い。言い換えれば、肯定論派と否定論派の両方ともは、「支那游记」の一端に偏っているとも言える。このように先行研究を押さえると、「支那游记」の再発見において、「支那游记」を芥川文学の過渡期に位置づけ、中国旅行を境に芥川文学の変容というマクロな視点から研究する論が多いと分かる。本章では、第一章の「南京の基督」論のように、「支那游记」のテキストに沿って、当時の中国の事実を見つめつつ、作中に書かれている中国の女性に注目し、ミクロな視点から「支那游记」を分析してみたい。

## 二 「支那游記」におけるジャーナリスト的な性格

芥川が中国へ出る前に、一九二一年三月九日に上野精養軒で送別会が催された。当夜送別会に出席したのは、久米正雄・里見弴・菊池寛・与謝野晶子夫婦・鈴木三重吉・南部修太郎などの四〇数名の人であった。芥川の中国旅行に関する道系、訪問、遊覧などの計画を控えた、一九一二年毎日新聞社に入社した先輩の薄田淳介宛ての芥川の書簡（一九二一年三月一日付け）によると、里見弴は送別会で、「支那人は昔偉かったその偉い支那人が今急に偉くなくなるといふことはどうしても考へられぬ支那へ行つたら昔の支那の偉大ばかり見ずに今の支那の偉大もさがして来給え」と話し、また「追憶」において、「私は、お土産のいゝ作品が出来るとは云ふまでもなからうけれど、普通人らしい見聞もまた伝えてほしい。つまり、芸術家らしい眼と共に、普通人らしい眼でも支那を見て来てくれたら」と自ら希望を述べたと回想している。芥川自身は「私もその心算であるのです」（右掲書簡に同じ）と呼応した。紀行通信文の作成計画について、「紀行は毎日書く訳にも行きませんが、上海を中心とした南の印象記と北京を中心とした北の印象記と二つに分けて御送りする心算です」（右掲書簡に同じ）と薄田淳介に執筆のことを打ち明けていた。

しかし、「一、「支那游記」をめぐる先行研究」のなかで紹介した通り、一九二一年八月から一九二五年一月まで、およそ四年の歳月にわたって、「支那游記」（「上海游記」、「江南游記」、「長江游記」、「北京日記抄」、「雑信一束」）が書かれて発表された。中国へ出発する前に、芥川は、旅行中「大阪毎日新聞」へ通信文を送る約束をしたが、実際現地に赴くと、「陸にあるや名所を見古跡を見芝居を見学校を見るの余暇は歓迎会に出席し講演会に出席し且又動物園の山椒魚を見んと欲する如く僕を見んと欲する諸君子を僕の宿に迎へざるを得ず、僕水にあるや船長につかまり事務長につかまり、時にその所蔵の贋書偽画を恭しく拝見せざる可らずその間に想を練り筆を駆らんとせば、唯眠を節すべきのみこれ僕を神経衰弱にする所以にして到底長続きすべからず

……僕やむを得ず帰朝後に稿を起さんと欲す」（一九二一年六月二日付け、薄田淳介宛ての書簡）と自ら述べたように毎日多忙で、体調も悪くしたことで、旅行中に原稿を書くことができなくなっていた。帰国後、大阪毎日新聞社の要請に応じて紀行文を書き始めた。このような「支那游記」の作る上の事実を念頭に置くと、約四年間にわたって書き継がれた「支那游記」において、近代中国が忠実に描かれているのか、という疑問を覚える。よって、「支那游記」を作る際に、芥川の創作理念を考察し、作中に書かれている近代中国の情勢とその創作理念と照らし合わせて、まず「支那游記」における写真性、或いはジャーナリスティックな性格を論じてみたい。

紀行文について、芥川はどんな見解を持つのかを窺おう。この問題を考察する際に、参考になり得るものは、新版『芥川龍之介全集』（岩波書店、一九九九年）第二二巻に初めて収録された未完成の草稿「紀行文論」（仮称、推定一九二一年）である。この草稿には、次のような内容が書かれている。

小説や劇曲を作ることは何人にも出来る芸当ではない。しかし紀行文を作ることは（中略）何人にも出来る芸当である。紀行文の紀行文たる所以は、何月何日某某君が某某地へ行つたと云ふだけに過ぎない。兎に角それだけ書きさへすれば、紀行文の体裁は具へるのである。現に我尊敬する蘇峯先生の著した「七十八日游記」などは、それ以外に一步も出てゐるのではないか？ この故に下愚は中学生から、上愚は大臣に至る迄、殆ど紀行文を書かないものはない。同時に又この故に何何游記と称するもの程、凡庸を極めた読み物は少ない。（中略）勿論古来紀行文の中にも、読むべきものなかつた訳ではない。たとへば梅川忠兵衛の道行き如きは、朗々誦すべき紀行文である。ああ云ふ上等の紀行文は、どうすれば作る事が出来るか？ 支那印象記の作者たる私は、夙にこの問題を考へ見た。

右の引用文から見れば、紀行文に対する芥川の一般的な評価は高いものではないが、「何月何日に某某君が某

某地へ行つた」、何を見何をしたかという紀行文における実写性を認めている。事実を忠実に書くことは紀行文の基本だという見解も、芥川は持っている。「上海遊記」における「十二 西洋」の問答体、「十四 罪惡」書簡体、「十八 李仁傑氏」のメモ風の文語体、「二十 徐家匯」の劇曲体、「江南遊記」における「八 西湖」での部分的な挿入の手法、「北京日記抄」における「二 辜鴻銘先生」の報告体、「五 名勝」の断片的に紹介する手法などを、「支那遊記」に設けたことから<sup>10</sup>、読者を退屈させないように芥川が工夫したと分かるだろう。これは、右の引用文から読み取れる中国印象記を魅力的且つ見事に（上等に）書こうとする芥川のこだわりと一致している。なお、そのような工夫の下に、「支那遊記」を紀行文という体裁の枠組みにおいて書くという芥川の考えも伺える。

大阪毎日新聞者の特派員としての芥川が中国へ出発した後、一九二一年三月の『大阪毎日新聞』朝刊は「支那印象記 芥川龍之介氏 新人の目に映じた新しき支那 近日の紙上より掲載の筈」という予告記事を載せた。記事は次のように書かれている。

旧き支那が老樹の如く横たわつてゐる側に新しき支那は嫩草の如く伸びんとしてゐる。政治、風俗、思想、あらゆる方面に支那固有の文化が新世界のそれと相交錯する所に支那の興味はある新人ラッセル氏やデュウイ教授の現に支那にあるのも、またベルグソン教授の遠からず海を超えてこようとするのも、やがてこの点に心を牽かるるに外ならぬ。吾が社はここに見る所あり、近日の紙上より芥川龍之介氏の『支那印象記』を掲載する、芥川氏は現在文壇の第一人者、新興文芸の代表的作家であると共に、支那趣味の愛好者としても亦世間に知られてゐる。

この予告から新聞社が求めているのは、激動する中国全般にわたるレポートで、気鋭の小説家が肌で感じた、

生々しくジャーナリストイックな記事であると読み取れる。これについて、張蓄は、「新旧中国の政治・風俗・思想全般にわたる見聞を記事に求めた新聞社（中略）の期待に応えて」、芥川本人が「長いあいだ自分のなかに形成しつづつあった中国の確認とともに新しい中国を発見し、新鮮な想念に満ちた紀行文を書こうとしたに違いない」<sup>(11)</sup>と分析する。この指摘はもつともであろうと思われる。この指摘を一步進めて言えば、新聞社の特派員として中国を旅した芥川は、紀行文を書く際に、新聞社に要求された生々しくジャーナリストイックな記事を書かなければならないと考えられる。旅行中に紀行文を執筆するのは困難だったものの、新聞社の特派員という仕事を果たすために、芥川は、「目に見る所、耳に聞く所、忘却し去るを恐るゝが故に、街頭にあると茶楼にあるとを問はず直に手帳を出してノオトを取る」（一九二一年六月二日付け、薄田淳介宛ての書簡）という紀行文を執筆する準備を怠らなかつた。芥川の中国旅行は大阪毎日新聞社から派遣されたものであったため、訪問先は大抵新聞社に決められた。その際の企画書自体も「支那游記」のメモだとも言える。そのうえ、中国滞在中の一九二一年三月二九日から同年七月一七日にかけて、中国旅行中の見聞に関わる芥川から友人への書簡は、長さを問わず約四五通に至る。これらの書簡は「支那游記」の参考のものだとも言えるし、または狭い意味上の「支那游記」とも言えるだろう。そのように「支那游記」の支度をしっかりと整えていることから、「支那游記」における写実性、或いはジャーナリストイックな性格が伺えるだろう。一つの例を挙げるならば、芥川は長沙で天心第一女子師範学校を見学した。「雑信一束」の「七 学校」の章に、その時身をもって体験した排日のことを書き留めている。関口安義のこのことを「事実を正確に伝えようとするジャーナリスト精神の賜物」とするという捉え方<sup>(12)</sup>に同意したい。

### 三 芥川の目に映じた近代中国の現実

では、ジャーナリスティックな性格を持つ「支那遊記」において、芥川が当時の中国社会をどのように描いているのかを、テキストに沿いながら纏めてみよう。

「上海遊記」の「第一瞥（上）（中）（下）」では、芥川は、赤煉瓦の建物、緑色の電車、東亜洋行というホテル、シェツファアドという料理屋、カッフエ・パリジャン、若い中国人の馬車の馭者、「赤いタバパンをまきつけた」印度人の巡查、上海に住んでいる「前後五年間、日本に住んでゐた」イギリス人のジョオonz、日本に「帰りたいわ」と繰り返した日本人の給仕女、「真赤な着物を着た」フライリッピン人の少女、「背広を一着した」アメリカ人の青年、「肥った英吉利」の老人夫婦、「髪を分けた」カフェ屋で「大きなピアノを叩いてゐる」中国人の少年、「頬紅の濃い女たちを相手に、だらのしない舞踊を続けてゐる」イギリスの水兵、「乞食のように手を出してゐる」薔薇の花を売る中国人の婆さん、客を争う中国人の黄包車夫など、欧米と日本帝国に侵略されつつある近代中国で生きている人々を浮世絵のように描き出しながら、街の印象を記しているものとも読める。上海は中国最長の河川である揚子江の河口デルタの先端に位置する。アヘン戦争後の南京条約によって開港後、急速に発展し、租界或いは「国の中にある国」と呼ばれる外国人の居住区が出現する。黄浦江沿岸には船着き場が設けられ、領事館、銀行、商社、ホテルなど、ヨーロッパ風の建物が立ち並んだ。「上海遊記」の章炳麟氏との対談内容を記する「十二 西洋」には、「上海は君の云ふ通り、兎に角一面では西洋だからね」という芥川の発言によると、特派員の芥川の目に映る近代中国は、列強に侵略されつつ、近代化の波に巻き込まれざるを得ない中国的社会と西洋的社会が共存する世界となっている。これは近代中国の史実と一致している。

「上海遊記」には、「悪の都会」上海で人力車夫が、追剥ぎに早変わりをすることや、人力車夫を走らせる間に、後ろから帽子を盗まれることなど、芥川が見聞した一般的な犯罪を記している。「その最もひどいものになると、女の耳環を盗む為に耳を切るのさへある。これは此処では折白党と云ふ、つまり無頼の少年団の一人が、金剛石の指環を奪ふ為に、蓮英と云ふ芸者を殺したのです」という弱い立場にいる女性へ犯罪も記録している。そ



れに、売姪女について次のように記している。

勿論売姪も盛です。青蓮閣などと云ふ茶館へ行けば、彼是薄暮に近い頃から、無数の売笑婦が集まつてゐます。これを野雉と号しますが、ざつとどれも見た所は、二十歳以上とは思はれません。それが日本人なぞの姿を見ると、「アナタ、アナタ」と云ひながら、一度に周囲へ集まつて来ます。「サイゴ、サイゴ」と云ふ事を云ひます。「サイゴ」とは何の意味かと思ふと、これは日本の軍人たちが、日露戦争に出征中、支那の女をつかまへては、近所の高梁の畑か何かへ、「さう行かう」と云つたのが、濫觴だらうと云ふ事です。（中略）鴉片も半ばは公然と、何処でも吸つてゐるうやうです。私の見に行つた鴉片窟などでは、かすかな豆ラムプを中にしながら、売笑婦も一人、客と一しよに、柄の長い煙管を銜へてゐました。

右の引用文から、当時の上海で犯罪、売姪や鴉片などは猖獗を極めていくということが読み取れるだろう。上海も享樂的頹廢的都市となり、戦乱で社会状況も悪化していく。

一方、「上海游記」の「十三 鄭孝胥氏」には「誰でも支那へ行つて見るが好い。必ず一月とゐる内には、妙に政治を論じたい気がして来る。あれは現代の支那の空氣が、二十年来の政治問題を孕んでゐるからに相違ない」と書かれるように、当時の上海では、政治運動も盛んになるのである。上海滞在中、芥川は章炳麟、李仁傑、鄭孝胥と会見した。「上海游記」の「十一章炳麟氏」において、章炳麟の言葉は次のように記されている。

現在の支那は遺憾ながら、政治にも墮落してゐる。不正が公行してゐる事も、或は清朝の末年よりも、一層夥しいと云へるかも知れない、学問芸術の方面になれば、猶更沈滞は甚しいやうである。しかし支那の国民

は、元来極端趨る事をしない。この特性が存在する限り、支那の赤化は不可能である。成程一部の学生は、労農主義を歓迎した。(中略)支那を復興するのは、どう云ふ手段に出るがよいか?この問題の解決は、具体的にはどうするにもせよ、机上の学説からは生まれる筈がない。古人も時務を知るものは俊傑なりと道破した。

章炳麟は古典学者であり、同時に辛亥革命の理論的指導者として有名である。右の引用文から、章炳麟は中国の現状に悲観的な見方を持っていたと分かる一方、積極的に国を救う方法を求めている知識層の姿と、若い国民の中に多少でも活気が見られたということも読み取れるだろう。若い国民を代表するのは李仁傑である。「上海游記」の「十八 李仁傑氏」によると、李仁傑は「共和」、「復辟」を退けて「社会革命」を唱えていた当時の中国ではまだ珍しい「社会主義者」である。芥川はこれらの知識人が持っている国を救うという切望をも「上海游記」において再現する。

「江南游記」 「十六 天平と靈巖と」において、排日の落書きを次のように記している。

天平山白雲寺へ行つて見たら、山に因る倚つた亭の壁に、排日の落書きが沢山あつた。「諸君 在快活之時、不可忘了三七二十一条」と云ふのがある。「犬与日奴不得題壁と云ふのがある。(中略)更に猛烈なやつになると、「莽蕩河山起暮愁。何来不共戴天仇。恨無十萬橫磨劍。殺尽倭奴方罷休。」と云ふ名詩がある。

侵略されつつ、侵略の深刻につれて中国側の反抗運動も蜂起するようになる。右の引用文には「犬与日奴不得題壁」「殺尽倭奴方罷休」などといった日本人が見たくない言葉を記していることから、芥川は中国人の反抗運動の波を忠実に書き留めていると分かるだろう。芥川は鋭い目で捉えた当時中国の状況を、見たままに、感じた

ままに伝えているとも言えるだろう。これについて、「『支那遊記』考——芥川龍之介の中国体験——」において、塚谷周次は「支那遊記」を「このジャーナリスト的才能」、云いかえれば鮮明な問題意識をもった大正期知識人の生々しい激動の中国レポートとして、うけとめるべきものである」と評価する<sup>13</sup>。先述した上海の情勢と照らし合わせれば、塚谷周次の論が妥当なものだと考えられる。

その他、明治憲法下の検閲制度、芥川の執筆意欲と読者への考慮や彼の健康状況などの因子も、「支那遊記」の創作を制約したということも無視することができないが、新聞社の要望に応えるための創作であるがゆえに、芥川は新聞社特派員という立場と責任を念頭に置き、約四年間の創作期にわたっても、「支那遊記」において、近代中国社会に正面切って立ち向かい、政治・思想・風俗などの様々な方面に目を配り、列強が蚕食しつつ、厳しい近代化の道を歩んでいる中国の素顔を素直且つ忠実に描いていると考えられる。

#### 四 芥川が身近に接した性商品としての女

まず、「上海遊記」の一五、一六、一七章に書かれた「南国の美人（上）（中）（下）」に注目しよう。南国の美人と出会った場所は「小有天」という酒楼である。神州日報の社長余洵氏により呼ばれてきた芸者たちを、テキストに沿いながら考察してみよう。

最初に登場してきた愛春は「如何にも利巧さうな、多少日本の女学生めいた、品の好い丸顔の芸者」である。芥川は「なりは白い織紋のある、薄紫の衣裳に、やはり何か模様の出た、青磁色の褲子だった。髪は日本の御下げのやうに、根もとを青い紐に括つたきり、長長と後に垂らしてゐる。額に劉海（前髪）が下つてゐる所も、日本の少女と違はないらしい。その外胸には翡翠の蝶、耳には金と真珠との耳環、手頸には金の腕時計が、いづれもきらきら光つてゐる」と愛春を描写する。愛春を描写する際に、「日本の女学生めいた」、「日本の少女と違

はないらしい」などの言葉から、異世界のものを描く時は、旅行者としての芥川は、自分が馴染んだ日本のものを参照して描くということが分かる。「女学生」、「少女」などの言葉から、愛春が操りやすく、支配される側に属するというイメージを想像できるだろう。「全体に調子の強い、何処か田園の匂いを帯びた、特色のある顔をしてゐる。(中略)全然愛春と変わりはない」と、江西の出身の芸者である時鴻を描写する。「全体に調子の強い、何処か田園の匂いを帯びた」という文から、時鴻が田舎出身だと推測できる。彼女にとつて、芸者であることは生の手段になつてしまふ。「黒い紋緞子に、匂の好い白蘭花を挿んだきり、全然何も着飾つてゐない。その年よりも地味ななりが、涼しい瞳の持ち主」である洛娥は、「貴州の省長王文華と結婚するばかりになつてゐた所、王が暗殺された為に、今でも芸者をしてゐると云ふ、甚薄命な美人」である。戦乱で悪化していく近代中国で、女性は婚約者に死なれたら、居場所がなくなり、すぐ流浪の身となつてしまふ。

「金の腕環や真珠の首飾りも、(中略)玩具のやうにしか思はれない」「十二三歳もおとなしさうな」少女(テキスト中に名前を明記していない)は、どう見ても「蕩児の玩弄に任す」ものとなつてしまふ。林黛玉という芸者は、「私の想像よりも、余程娼婦の型に近い、まるまると肥つた女」である。彼女は「顔も今では格段に、美しい器量とは思はれない。頬紅や黛を粧つてゐても、往年の麗色を思はせるのは、細い眼の中に漂つた、さすがにあでやかな光だけである。(中略)なりは銀の縁をとつた、蘭花の黒緞子の衣裳に同じ鞞形の褲子だつた。それが耳環にも腕環にも、胸にさげた牌にも、べた一面に金銀の台へ、翡翠と金剛石とを嵌めこんでゐる。中でも指環の金剛石などは、雀の卵程の大きさがあつた。これはこんな大通りの料理屋に見るべき姿ぢやない。罪悪と豪華とが入り交つた、たとへば、「天鷲絨の夢」のやうな、谷崎潤一郎氏の小説中に、髣髴さるべき姿」である。この描写から見ると、林黛玉という芸者を古典的な女性として描き出したが、「あの人は鴉片を呑まないと、もつと若くも見える人ですよ」という余洵氏の言葉によると、林黛玉という芸者も鴉片という麻薬の害を受ける体となつてゐる。花宝玉は「色の白い、小造りな、御嬢様じみた美人」である。「宝尺しの模様を織つた、薄紫の

緞子の衣裳に、水晶の耳環を下げてゐるのも」、一層花宝玉の「品の好さを助けてゐるのに違ひない」。

ここで指摘したいのは、この芸者たちが持つ共通点である。一つ目は、濃艶な化粧、綺麗な衣裳と貴重な飾り物に装われ、性的な機能を使用価値とした受動的な商品として市場に投じられ、客に消費されるというところである。彼女たちは綺麗に装われるほど、商品性が高くなって人間性が薄くなる。花宝玉の食事を摂る姿を見、芥川は「この時支那の女に、初めて女らしい親しみを感じた」と述べる。なぜかというと、綺麗に装われる受動的な性的な商品として客に消費される時より、簡単な食事を摂る時、彼女の人間性として、女として生きていくというイメージが商品性を圧倒したからだと考えられる。二つ目は、帝国主義（侵略者）と、封建主義（儒教倫理における家父長制、男性支配）と、階級（芸者は身分が低い、下層社会の被支配階級に属する）との三つの権威に支配されるといふところである。前述した日露戦争に出征中、日本兵は「支那の女をつかまへては、近所の高梁の畑か何かへ」といふことと、芸者たちの芥川のような「国の中にある国」の外国人への奉仕などといったことから、当時の中国女性に帝国主義（侵略者）に支配されていると強く感じられるだろう。「貴州の省長王文華と結婚するばかりになつてゐた所、王が暗殺された為に、今でも芸者をしてゐると云ふ、甚薄命な美人」である洛娥のことに、家父長制社会における男性が女性を支配するという男性主義が投影されているとも考えられる。三つ目は、彼女たちの姿から、当時の中国ですでに掲げられる近代思想を受け入れようとしたり、帝国侵略へ反抗しようとしたりする意欲が読み取れないということである。一九二一年という時点で、中国にはすでに新文化運動（一九一五年）と五・四運動（一九一九年）が行われたが、文化中に内在している観念は一夜のうちに完全に変わってしまうわけではない。新思想の受容も否応なしに一つの漸進的な転換過程を経過しなければならぬ。まだ新思潮を受け入れていない女性がたくさんいるのも、当時の中国における事実だとも言える。四つ目は、彼女たちに「南京の基督」の宋金花におけるロマンチズムの色彩がないということである。「江南游記」の「二十八南京（中）」には、芥川にとってのエキゾチックでロマンな秦淮は次のようになっていふ。

橋上より眺むれば、秦淮は平凡なる溝川なり。川幅は本所の堅川位。兩岸に櫛比する人家は、料理屋芸者屋の類なりと云ふ。人家の空に新樹の梢あり。人なき画舫三四、暮靄の中に繋がれしも見ゆ。古人云ふ。「煙籠寒水月籠沙」と。這般の風景既に見るべからず。云はば今日の秦淮は、俗臭紛紛たる柳橋なり。(中略) 飯館を出づれば既に夜なり。家家の電燈の光、妓の人力車に駕せるを照す。(中略)されど一の姝麗を見ず。私に疑ふ。『秦淮画舫記録』中の美人、幾人か懸け値のなきものある。『桃花扇伝奇』の香君に至つては、独り秦淮の妓家と云はず、四百州を遍歴するも、恐らくは一人もあらざるべし。……

芥川の目に映る現実の秦淮は、自分の育つた堅川と同様「平凡な溝川」に過ぎない。その地も「俗臭紛紛たる柳橋」になつてしまふ。唐代の詩人杜牧が『泊秦淮』で詠んだ「煙籠寒水月籠沙」のロマンな風景はもはやない。名妓李香君のロマンチックな話ができた秦淮には「一人の姝麗もいな」い。言い換えれば、ロマンを極める李香君も、「気の優しく」て単純な宋金花も、もはや「俗臭紛紛たる」秦淮に不在だった。つまり、かつてロマンの色彩が濃かった秦淮はともかく、芥川が「小有天」で見た芸者たちも、性商品として消費され支配される「俗臭紛紛」の女ばかりである。以上は芥川が身近に接した支配される性としての女性像である。

##### 五 芥川が感じたと反抗しようとする女

一方、芥川は「支那遊記」において、民族的、家父長制的、階級的支配に反抗しようとする女にも目を配っている。「十五 南国の美人(上)」には、「確か雅叙園の局票(引用者注…局票は客が芸者を呼ぶために使う札である)には、隅に母忘国耻と排日の気焰を挙げていた」という一句がある。排日運動のスローガンは芸者にま

で伝わっていたということから、当時の中国で排日運動が勢いよくされたと読み取れる。

「母忘国耻」の「国耻」は、一九一九年一月からのパリ講和会議で山東問題についての外交交渉が失敗し、袁世凱の北洋軍閥政府が、日本の出した中国侵略を主な目的とした「二十一か条」を承認したということである。親日官員の罷免と講和条約調印拒否を求める五・四運動が勃発した。民族運動の高まりにつれて、女性も積極的に社会運動に参加するようになる。「雑信一束」の「七 学校」の章には、次のような記事が見られる。

長沙の天心第一女子師範学校並に附属高等小学校を參觀。古今に稀なる仏頂面をした年少の教師に案内して貰ふ。女学生は皆排日の為に鉛筆や何かを使はないから、机の上に、筆硯を具へ、幾何や代数をやつてゐる始末だ。次手に寄宿舎を一見したいと思ひ、通訳の少年に掛け合つて貰ふと、教師愈仏頂面をして曰、「それはお断り申します。先達もこの寄宿舎へは兵卒が五六人闖入し、強姦事件を惹き起こした後ですから！」

『二〇世紀中国女性史』<sup>(14)</sup>において、五・四運動のなかで、女性の運動参加について、次のように書いている。

直隸第一女子師範の学生は、五月五日に集会を開いて講和条約調印拒否と逮捕された北京学生釈放を政府に打電することを決めた。運動方針として婦女救国团组织、男子校との共同行動、日貨ボイコットなどが挙げられている。(中略)五月二五日、学生、教員、宗教団体、家庭女性によって天津女界愛国同志会が結成され、その後各地でつくられる女界連合会のさきがけとなった。日貨ボイコットのほか、(中略)救国と女性の自立を結合させる方針を打ち出している。

右の引用文に書かれているように、当時の中国では、新文化運動と五・四運動の影響で、女子学生をはじめ、

自己を主体にして帝国主義（侵略者）的、家父長制的支配に意識的に向き合う女性もだんだん増えていく。『二〇世紀中国女性史』に書かれるてい事実と照らし合わせ、「雑信一束」の「七 学校」を読めば、芥川は帝国侵略に反発する運動に積極的参加する近代中国女子学生の姿を忠実に書き留めていると言えるだろう。

西洋化に巻き込まれ、侵略されつつある中国と、「救国」の為に様々な考えが溢れ出し、エリート知識人をはじめ、侵略に反抗し国を救おうとする人々に語られる中国と、芥川の目には二重の近代中国の面影が映っている。そのような近代中国には、帝国主義（侵略者）と、儒教倫理における家父長制と、階級との三つの権威に支配される女性もいれば、自己覚醒し、民族的、家父長制的、階級的支配に積極的に反抗しようとする女性もいる。これこそが、「支那遊記」における芥川が語っている近代中国の「国」と「人」である。

## 六 新しいタイプの近代中国女性に対する芥川の冷ややかな視線

芥川は当地在留の日本人が刊行していた雑誌『日華公報』の記者の求めに応じて、「新芸術家の目に映じた支那の印象 芥川龍之介氏談」（『日華公報』一九二一年八月一日）において、中国の印象を語っている。「第一印象としては鶏が油で焼いてあるのやそれから豚を丸の儘で皮を削いで吊り下げてあるのを至る処で見た事でありませぬ。支那では古くから各人が自由に動物を屠殺する習慣になつて居るのは宜敷ないと思ひます。之れは一般支那人が知らず識らずの間に残忍性を帯びて来ることであります」と述べ、その第一印象によつて、彼の中国に對する憧れはがらりと崩壊してしまつたと言える。旅をするほど、彼の近代中国への嫌悪も激しくなつてきた。当時の中国に對して、中国に着いてから一ヶ月半後、芥川は「長江遊記」の「一 蕪湖」において中国への思いを次のように書かれている。



その夜唐家花園のバルコンに、西村と籐椅子を並べた時、私は莫迦莫迦しいほど熱心に現代の支那の悪口を云つた。現代の支那に何があるか？ 政治、学問、経済、芸術、悉く墮落してゐるではないか？ 特に芸術となつた日には、嘉慶道光の間以来、一つでも傲慢になる作品がある？ しかも国民は老若を問わず、太平樂ばかり唱へてゐる。成程若い国民の中には、多少の活力も見えるかも知れない。しかし彼等の声と雖も、全国民の胸に響くべき、大いなる情熱のないのは事実である。私は支那を愛さない。愛したいにしても愛し得ない。この国民的腐敗を目撃した後も、なほ且支那を愛し得るものは、頽唐を極めたセンジュアリストか、浅薄なる支那趣味の恂恍（誤字）者であらう。いや、支那人自身にしても、心さへ昏んでゐないとすれば、我我一介の旅客よりも、もつと嫌悪に堪へない筈である。……

これは「支那游記」一巻の中では最も辛辣な「悪口」である。芥川は「侏儒の言葉」（一九二三年一月から『文芸春秋』に連載）の「支那」には、「蚩の幼虫は蝸牛を食ふ時に全然蝸牛を殺してはしまはぬ。いつも新らしい肉を食ふ為に蝸牛を麻痺させてしまふだけである。我日本帝国を始め、列強の支那に対する態度は畢竟この蝸牛に対する蚩の態度と選ぶ所はない」と書くのは、おそらく旅行中「心さへ昏んでゐる」る中国人の姿を見たからであらう。「支那に対する私の嫌悪はだんだん逆上の気味を帯び始」め、ついに西村との談話で爆發する。ストリートな表現による感情的且つ衝動的発言には、芥川的な諧謔や揶揄などが一切見られない。実は、芥川の近代中国への嫌悪が近代中国女性にも移つたのである。

杭州を旅行した間、芥川は鑑湖女侠之墓と題した清末期の女性革命家秋瑾の墓に詣で見物した。「江南游記」の「七 西湖（二）」には、「私はさつき秋瑾女史の墓前に、やはりこの煉瓦の門を見た時、西湖の為に不平だつたばかりか、女史の靈の為に不平だつた。「秋風秋雨愁殺人」の詩と共に、革命に殉じた鑑湖秋女侠の墓門にしては、如何にも氣の毒に思はれたのである」とこの墓参りを記す。秋瑾は夫の言うことなど歯牙にもかかず、

女性解放と革命の道をまっしぐらに進んだ新しい女性であった。その行動によって、儒教倫理の「三綱」と激しく対決した。革命運動を進め、処刑される前の一九〇七年一月に創刊した『中国女報』の「発刊の辞」で、女性界は決して清朝や外国列強に奉仕する道を歩まないと革命への原則を提起した<sup>15</sup>。生涯に亘って幅広く女性を呼び掛けようと、字を読めない人にも、女性解放に関心のない人にもメッセージを届けようとする姿勢は変わらなかった。このような女性に対しても、芥川は筆を惜しんで「如何にも気の毒に思はれた」としか興味を示さない。民族的、家父長制的、階級的支配に意識的に反抗しようという精神面を持つ新しい女性は一体どんな様子だったのか、川島真は『近代国家への模索』<sup>16</sup>に、当時中国に現れた新しいタイプの女性を次のように書いている。

上海などでは、女子学生たちが短髪やおさげ髪に、短い上着とスカートという「文明新装」の姿をし、「新しい女性」の代表のように見られた。女子学生たちは映画を好んだという。(中略)そして映画スターの服装をまねるなどして、西洋式のファッションが関心事となった。

このような近代中国女性に対する芥川の冷ややかな視線は、「支那遊記」の中にもしばしば見られる。例えば、「上海遊記」の「十四 罪悪」において、眼鏡をかける女性に対して、「彼等はどうか云ふ料簡か、大抵眼鏡をかけてゐます。事によると今の支那では、女が眼鏡をかけてゐる事は、新流行の一つかも知れませんが」とアイロニーを込めた言葉で近代化に巻き込まれ、西洋のファッションを受け入れる女を揶揄する。また、芥川は蘇州を旅した時、玄妙観で蘇州の女を見た。「江南遊記」の「十四 蘇州城内(中)」において、蘇州の女を「漆のやうに髪が光つた、若い女が二三人、鶉色や薄紫の着物の尻をわざと降るやうに歩いてゐても、何処か鄙びた寂しさがある。」と記し、「私は昔ピユル・ロデイが、浅草の観音に詣でた時も、こんな気がしたのに違ひない」と諷

刺めいた言葉を述べ、蘇州の女をハイカラな女性として認めようとはしない。北京で「胡蝶夢」という昆曲の芝居を見てから、目の前に現れた女性に目を配った。「北京日記抄」の「四 胡蝶夢」において、「新月北京の天に懸り、ごみごみしたる往来に背広の紳士と腕を組みたる新時代の女子の通るのを見る。ああ云ふ連中も必要さへあれば、忽——斧は揮はざるにもせよ、斧よりも鋭利なる一笑を用ゐ、御亭主の脳味噌をとらんとするなるべし」と想像し、「新時代の女子」を残酷な人間として諧謔する。帰国する直前、中国旅行を振り返る芥川の感想にも、「支那の学生でも断髪してゐる婦人でも非常に新らしがつてゐるけれども実際は一種のカブレであるから頗る危険である」という批判も見られる。芥川の言葉を簡単に解釈すれば、戦乱で動きつつあった当時の中国で、女性は中国的な着物を着ても、中国的な生活を送れない、西洋的な着物を着ても、西洋的な生活を送れるわけでもない。芥川は、古典からイメージした女性像と大きなギャップがある近代の新しいタイプの女性に興味を示さない理由は、中国古典文学に描かれる女性を憧れているということにあるだろうか。

「上海游記」の「二十一 最後の一瞥」中では、煙草を出そうとする所に、ポケットから白蘭花が落ちたことを記している。

一瞬間の後、私は素枯れた白蘭花を拾ひ上げてみた。白蘭花はちよいと嗅いで見たが、もう匂さへ残つてゐない。花びらも褐色に変つてゐる。「白蘭花、白蘭花」——さう云ふ花売りの声を聞いたのも、何時か追憶に過ぎなくなつた。この花が南国の美人の胸に、匂つてゐるのを眺めたのも、今では夢と同様である。私は手軽な感傷癖に、随し兼ねない危険を感じながら、素枯れた白蘭花を床へ投げた。

ここで、白蘭花は花売り人と白蘭花を飾る南国の美人の象徴となる。芥川が取った「白蘭花を床へ投げた」という行為の背後に、芥川の近代中国への失望、中国旅行中に自分の目で確かめた中国を忘れようとする情緒が潜

んでいるのではないだろうか。

芥川は、検閲制度、執筆意欲と読者への考慮や健康状況などの条件に制約されたものの、新聞社特派員という立場と責任を念頭に置き、「支那游記」において、近代中国社会に正面切って立ち向かい、政治・思想・風俗などの様々な方面に目を配り、列強が蚕食しつつ、厳しい近代化の道を歩んでいる中国の素顔を素直且つ忠実に描き出した。西洋化に巻き込まれ、侵略されつつある中国と、「救国」のために様々な考えが溢れ出し、エリート知識人をはじめ、侵略に反抗しようとする人々に語られる中国と、芥川の目には二重の近代中国の面影が映っている。そのような近代中国には、帝国主義（侵略者）と、儒教倫理における家父長制と、階級との三つの権威に支配される女性もいれば、自己覚醒し、民族的、家父長制的、階級的支配に積極的に反抗しようとする女性もいる。「南京の基督」の中に造形されている宋金花の姿は「支那游記」にはすでに見えなくなる。その代わりに、中国古典的なイメージを失い、西洋カブレのイメージもある女性が登場してくる。「支那趣味」を求める芥川にとっては、憧れの中国と現実の中国のギャップがあまりに大きいため、目に映じた現実の中国への嫌悪感が生じ、新しいタイプの女性をも冷ややかな視線で見つめているようになった。

「支那游記」から芥川の近代中国への嫌悪を読み取れる一方で、彼は近代中国に対して一切関心を持っていないとは言えない。その根拠として、北京で発行される日本語新聞『日刊新支那』一九二一年六月一四日付けの紙面に、「支那の進歩と社会教育の必要 芥川龍之介談」において、「支那の今日の社会は、有識者と無識者の間隔が余り有り過ぎて、其中間の者がありませんから、学校教育のみへ依らず社会教育と云ふものを起してたらよいと思つて居ります」と当時の中国における中間層の欠乏と社会教育の必要性を鋭く指摘したことが挙げられる。中国の名所古跡を見物したり、楽屋に役者を訪ねたりしたほか、政治家で後に満州の国務総理となった鄭孝胥や、古典学者で評論家・政治家の章炳麟などの旧い層、「若き支那」を代表する李仁傑らにも会った。中国で文人や政治家たちに会い、中国のことをめぐるさまざまな政治的議論を交わしたことは、芥川の帰国後の精神生活に少

なからざる影響を及ぼすこととなる。旅行で見た中国を忘れようとする姿も「支那遊記」に書かれているが、芥川は心の底から中国を見つめていると言える。

「もし『桃花扇伝奇』の香君に至つては、独り秦淮の妓家と云はず、四百州を遍歴するも、恐らくは一人もあらざるべし。……」（「江南遊記」の「二十八 南京（中）」）、「前髪を垂れた小妓が一人、桃色の扇をかざしながら、月湖に面した欄干の前に曇天の水を眺めてゐる」（「雑信一束」の「四 古琴台」）。このような思ひは、芥川の心の底に動いていたのだろうか、そのような思ひからは、どんな作品が生まれてくるのだろうか、第三章では、中国旅行を終えた約四年半後書かれた「湖南の扇」について検討してみたい。

#### 注

(1) 芥川は南方から北京へ北上し、天津、奉天（瀋陽）を経、朝鮮を経由して釜山から航路下関に向かった。下関港に着いた日は特定できないが、関口安義は『芥川龍之介とその時代』（筑摩書房、一九九九年三月二〇日）において、一九二一年七月一七日であったとそうのように推定している。

(2) 日本において「支那遊記」は単なる新聞記事として読まれ、芥川の他の作品に纏わる作品論と比べれば、「支那遊記」論は極めて稀であった。中国においては、「支那遊記」を外国人が見た近代中国像の重要な部分だと認めるが、否定論も多かった。中国作家巴金は「幾段不恭敬的話」（『太白』第一卷第八期、一九三五年一月五日、一九三五年四月の『點滴』に収録した）において、帰国した芥川は果たしてその文章の「支那」を「日本」に置き換えて考えて見ただろうかと主張し、「私は反感を抱かざるを得ない」と言う。さらに、「支

那游記」に記される芥川の当時の中国祭りなどのものを異文化という壁の所以か、「醜い」物としての捉え方が、かなり中国読者や論者の反感を招いている。この点を視座にして芥川の差別意識を批判する論は、今でもしばしば見られる、これについて、本章で言及した祝振媛の論を参照。

(3) 祝振媛「『支那游記』」(『解釈と鑑賞』第六四卷第一号 特集「芥川龍之介作品の世界」、一九九九年一月)。

(4) 関口安義『芥川龍之介とその時代』(筑摩書房、一九九九年三月)。

(5) 秦剛「『支那游記』——日本へのまなざし」(『解釈と鑑賞』第七二卷第九号、二〇〇七年九月)。

(6) 鈴木暁世「芥川龍之介「支那游記」論——『馬の脚』『湖南の扇』への影響について——」(『語文』第八七輯、二〇〇六年一月)。

(7) 張蕾『芥川龍之介と中国 受容と変容の軌跡』(国書刊行会、二〇〇四年四月)。

(8) 注(4)に同じ。

(9) 里見淳「追憶」(『文芸春秋』一九二七年九月)。

(10) 注(7)に同じ。

(11) 注(7)に同じ。

(12) 注(4)に同じ。

(13) 塚谷周次「『支那游記』考——芥川龍之介の中国体験——」(北海道大学編『近代文学論叢十』、一九七一年一〇月)。

(14) 末次玲子『二〇世紀中国女性史』(青木書店、二〇〇〇年五月)。

(15) 注(14)に同じ。

(16) 川島真『近代国家への模索 1894—1925』(岩波書店、二〇一〇年一月)。

### 第三章 「湖南の扇」に登場する林大嬌と日本人旅行者

#### 一 「湖南の扇」をめぐる先行研究

一九二六年一月の『中央公論』に発表された短編小説「湖南の扇」は芥川龍之介が実際に中国湖南の省都である長沙を訪れてから四年半余り経って書いた中国旅行の土産と言われる作品である。芥川は斎藤茂吉宛の書簡（一九二五年一月三日付け）に、「小生はいろいろ不快な中に短編二つ拵へ候へども中央公論の方は出来損ひなり」と自ら語ったものの、第八短篇集、生前出された最後の短編集を「湖南の扇」と名づけた。

この作品について、新潮合評会で、芥川は「仕舞の方が出来損つてゐる」と自評する<sup>(1)</sup>。新潮合評会の出席者の一人田山花袋は「支那人があれを見たら非常に齒の浮くやうな感じがしはしないか。そこが物足りない」と感想を添える<sup>(2)</sup>。「報知新聞」に宇野浩二は「一字一句も疎略していいないが」、「楽に書いた作品」という評を寄せ<sup>(3)</sup>。それに対して、「読売新聞」に田山花袋は「筆致が絢爛で、才筆煥発で、ちよつと他人には真似の出来なところがある」と芥川と反対の評価を下す<sup>(4)</sup>。吉田精一は「小説としてよりも、旅行記の一節といったやうな淡々とした味があり、苦心のわりに報いられない」と評する<sup>(5)</sup>。神田由美子は「湖南の扇」の手法は、「芥川晩年の「筋のない小説」の世界を確実に示している」と指摘する<sup>(6)</sup>。

芥川が自殺した後、中国近代文壇が芥川を記念するために、一九二七年一〇月に出版された『小説月報』<sup>(7)</sup>の第一八巻第九期は『芥川龍之介全集』を組み、夏丐尊<sup>(8)</sup>が訳した「湖南の扇」等の作品を掲載する。中国において、「湖南の扇」は芥川の近代中国を旅した見聞の所産と読まれ、外国人が見た近代中国像の重要な部分だと認められる。同時代の中国文壇は、「湖南の扇」を含む芥川の近代中国に関わる作品の中に漂っている芥川の差別意識を批判したが、訳者としての夏丐尊には、「芥川の風刺の態度はわざと中国に向けたのではなく、日本も時々作品

の中で非難した」という発言がある<sup>(9)</sup>。現在の中国において、この作品の新たな解説が求められ、作品に新しく評価し直す傾きが見られる。例えば、姚紅は巧妙な設定を通して読者に革命の「情熱に富んだ中国民衆の面目を示した」作品として「湖南の扇」を新たに評価する<sup>(10)</sup>。

日中両国において、この作品は様々な視点から研究されているが、管見の限りでは、この作品を中国革命の文脈に配置し、中国革命の流れに沿いながら、作品を解説した作品論が圧倒的に多い<sup>(11)</sup>。この作品に登場する女性について、姚紅は中国社会学研究と史資料を踏査し、辛亥革命以降の中国で妓女も積極的に革命党に協力し、革命活動に身を投じた事を証明した上で、革命情熱に富んだ玉蘭と含芳の人物造形を解説する<sup>(12)</sup>。紅野敏郎が「一人のこの美しい女性のしたたかな気質に大きな意味を発見した故に、一編の物語をつくりあげたのである」と述べる<sup>(13)</sup>。関口安義は「人血のしみこんだビスケットを食べるといのは、殺された愛人へのレクイエム、玉蘭という女の情熱を語っている」と指摘する<sup>(14)</sup>。劉建輝は「女主人公に代表される湖南の「負けぬ気の強い」土柄が、どこかで上海などで目にしていたあの半植民地的な「だらしない」混沌と比較されている」と評する<sup>(15)</sup>。

この物語の構成に注目しよう。この作品は旅行記の形で展開し、最初をプロローグ、最後をエピローグとすれば、中心となる「小事件」の話は三つの章からなる。その第一章で、一九二一年五月一六日湖南の省都である長沙に着いた「僕」はBさんの代わりに迎えに来た譚永年と出会う。第二章では、その翌々日に譚永年の勧めで嶽麓に行く途中、湘江を渡るモーター・ボートの上から、処刑された土匪黄六一の情婦だったという玉蘭を見かける。第三章は、その日の晩に「或妓館」で再会した玉蘭の、愛人の血の染み込んだビスケットを食べるといふ「情熱に富んだ」行為を目撃する話である。作品の構成を見れば、これらの論説は血のビスケットを食べる玉蘭と扇をかざしている含芳を焦点に当たり、近代中国女性の「負けぬ気の強い」情熱を論述すると分かる。林大嬌という女性を論じるものが見られないのも事実である。この作品の読みにおいても、玉蘭が血のビスケットを食べる場面がクライマックスに当たり、玉蘭を「負けぬ気の強い、情熱に富んだ」湖南の民の象徴だと捉える通説があ



る。このように考えれば、林大嬌という脇の人物を登場させなくても、この物語が成立できるのだが、「僕」がなぜ林大嬌を造形しなければならぬのか、林大嬌をどのように造形しているのが問題になる。本章においては、「僕」が作り上げた林大嬌の女性像を検討してみたい。さらに、「湖南の扇」の取材の源と考えられる「支那游記」を援引しながら、近代中国の実態を参照しつつ、「僕」が林に興味を示さない理由を発掘してから、この作品を再評価してみる。

## 二 「僕」という日本人旅行者

この物語は、「僕」の回想によって展開され、「僕」の旅行体験談として読者に読ませる形である。作中で、「僕」は語り手の立場において作品の世界を支配するわけである。よって、語り手の「僕」が作者と重なって映る部分はどうしても大きい。ここで論じたいのは、作中に「僕」を芥川龍之介の分身だと思わせる仕掛けである。

まず、作品のプロローグにある「僕は湖南へ旅行した時、偶然ちよつと小説じみた下の小事件に遭遇した」という一句に注目しよう。「僕は湖南へ旅行した時」という文は、読者に芥川の中国旅行を連想させる働きを果たしている。そのうえ、作中に散在する「僕は当時長江に沿うた大抵の都会に幻滅してゐた」、「僕等の通つた二階の部屋は中央に据ゑたテエブルは勿論、椅子も、痰壺も、衣裳箆筒も、上海や漢口の妓館にあるのと殆ど変りは見えなかつた」などの文を見ると、読者に、この作品を現実の作家の体験として受け止められるように十分に仕掛けていると考えることができる。次に、「小説じみた下の小事件」という文における「小説じみた」は、そこに書かれている内容が虚構としての小説ではなく、事実だと思わせる表現である。それに、「それはやはり同室だつた菊池寛の言つたように」などの文では、菊池寛という実在の芥川の親友に触れることで、「僕」が当時の芥川自身をイメージさせる。更に、この作品のクライマックスとなる小事件の発生した場所は妓館に設置される。本研究

の第二章の中に示したように、作者芥川は実際に湖南長沙へ旅に出た。長沙埠頭と湘江兩岸の風物が実際に現地を見た風景である。作中に記されている長沙の第一印象、特に棧橋の光景の描写は、一九二一年八月から一九二五年十一月にわたって、発表された芥川の紀行文である「支那游記」に収録された「上海游記」の中の「一瞥」における作者の觀察の目を彷彿させる。「支那游記」においては、中国滞在中、芥川の何回かの芸者と同席した経験も描き出している。「湖南の扇」においても、妓館内の接客情景や人間模様などは、「上海游記」の一節「南国の美人」の中の場面と一致しているところがかなり多い。妓館での出来事は当時の芥川の実体験であるという考えに導かれるのである。作中に含芳の最初の登場を「僕は棧橋の向うに、——枝のつまつた葉柳の下に一人の支那美人を發見した。(中略)彼女はその上に高い甲板を見上げたまま、紅の濃い口もとに微笑を浮かべ、誰かに合ひ図でもするやうに半開きの扇をかざしてゐる」と描写する。これは、「支那游記」に書かれている「前髪を垂れた小妓が一人、桃色の扇をかざしながら、月湖に面した欄干の前に曇天の水を眺めてゐる」(「雜信一束」の「四 古琴台」という描写と、大いに重なっているだろう。

更に、芥川の「手帳 六」と「手帳 九」における長沙の関連記事を取り出すと、次のような内容がある。

「長沙。モオタア(ボーイ二人)。水陸洲。橘洲。中ノ島。」「湘南公立工業学校。(略)」、「(略)麓山寺碑亭(白かべ)」、「劉人熙。湖南督軍都督。(略)」、「愛晚亭。(略)」、「岳麓寺(万寿寺)。古刹重光(赤壁)。(中略)望湘亭。」「太平乱以後十八省ノ巡撫湖南人トナル。ソノ上米ヨク出来ル。故ニ町立派ナリ。学校モ多シ。——古川氏の話」、「湖南長沙蘇家巷怡園。葉。」「張繼堯(湯(弟))ト譚延闓ノ戦の時張の部下の屍骸土を蔽ふ事浅ければ屍骸湘江を流る。」「日清汽船の傍、中日銀行の敷地及税関と日清汽船との間に死刑を行ふ。刀にて首を斬る。支那人饅頭を血にひたし食ふ。——佐野氏。」「天心第一女子師範学校。(中略)附属幼稚園。附属高等小学校、国民学校。(略)」。

「水陸洲。税関官舎。英国領事館。湖南。広東。黄興。宋教仁。支那亡国紀念会。秦力山。湖広総督。張之洞。武昌の両湖書院。」

「湖南の扇」のテキストを「手帳」に記される内容と照らし合わせて検討してみよう。テキストの中にある湖南についての描写を纏めると、「広東に生まれた孫逸仙を除けば、目ぼしい支那の革命家は、——黄興、(略)宋教仁等はいづれも湖南に生まれてゐる。これは勿論曾國藩や張之洞の感化にもよつたのであらう、(略)折角の譚の勧めに従ひ、湘江を隔てた嶽麓へ麓山寺や愛晩亭を見物に出かけた、「僕等に乗せたモオタア・ボオトは在留日本人の「中の島」と呼ぶ三角洲を左にしながら、(略)、「あれは日本領事館だ」、「この三角洲は橋洲と言つてね」、「いつか張継堯と譚延闓との戦争があつた時だね、あの時にや張の部下の死骸がいくつかもこの川へ流れて来たもんだ」、「あの棧橋の前の空き地で(中略)土匪の首を斬つたつて?」、「嶽麓には湖南工業学校と言ふ学校も一つあるんだがね」、「或女学校を參觀に出かけ、存外烈しい排日的空氣に不快を感じてゐた為だつた」、「これは唯のピズケットだがね。(中略)あの黄の首の血をしみこませてあるんだ」、「(略)これを食へば、無病息災になると思つてゐるんだ」、などといったものが見られる。傍線部を見れば、作者は「手帳」の長沙関連記事を作中で多数使つてゐると分かるだろう。要するに、「湖南の扇」という作品は芥川の中国旅行に基づき、旅行中の実体験を織り込み、如何にも事実のように書かれてゐると言えるだろう。作中に書かれてゐる物語の現実性、実在性を裏打ちしようとする作者の姿もうかがわれる。

以上の分析したもののように、芥川の中国題材作品群において、「湖南の扇」を紀行文「支那遊記」の延長として書かれた作品としても読める。作中には、日本人旅行者の「僕」を中国旅行中の芥川龍之介自身だと思わせるように、作家芥川が意図的に仕掛けてゐるところがよく見られる。したがつて、この作品の読みにおいては、「僕」をその当時の芥川と重ねる部分を持つ存在だと見つつ、紀行文「支那遊記」を援引することが一つの有効

な方法であると考えられる。

### 三 「湖南の扇」における林大嬌の女性像

ここでは「湖南の扇」における林大嬌の人物造形を論じる。結論から言うと、作中に「僕」のまなざしを通して、林大嬌を含芳と玉蘭と対照して造形している。まず、林大嬌の身なりと姓氏を考察してみたい。そのために含芳、玉蘭、林大嬌という三人が初めて登場する場面を押さえよう。

僕は棧橋の向うに、——枝のつまつた葉柳の下に一人の支那美人を発見した。彼女は水色の夏衣裳の胸にメダルか何かをぶら下げた、如何にも子供らしい女だった。僕の目は或いはそれだけでも彼女に惹かれたかも知れなかつた。が、彼女はその上に高い甲板を見上げたまま、紅の濃い口もとに微笑を浮かべ、誰かに合ひ図でもするやうに半開きの扇をかざしてゐる。

これは含芳が初めて登場する場面である。長沙に到着した日本人旅行者の「僕」は、「長江に沿うた大抵の都会に幻滅してゐる」たので、実際に目にした湖南の府城や白壁、瓦屋根や西洋家屋、うす汚い中国人や狭苦しい埠頭などに対して、殆ど軽蔑する態度を見せている。目的地の姿に失望し、まったく情熱がなくなり、「僕」の倦怠感が読者の前に表わされてくる。含芳の登場する場面では、日本人旅行者の「僕」は見る主体で、含芳が見られる対象である。構図から見ると、他の見窄らしい光景と比べれば、夏衣裳を着、紅の濃い口もとに微笑を浮かべ、半開きの扇を飾っている女は、陰気で陰鬱な背景の中に輝き、一層引き立つ存在になる。更に、芥川が幼いから中国古典文学に親しんだことを考慮すれば、含芳がかざしている扇は「僕」に南京秦淮名妓の悲劇を語る中国古

典の『桃花扇』<sup>(16)</sup>を想起させると考えられる。「僕」の男性中心主義的な視線を通して扇を飾り誰かに合図しようとする「子供らしい」含芳の、謎じみたエキゾチックな人物像を浮かび上がらせようとしている。「僕」は案内してくれる旧友の譚の勧めで、モーター・ボートに乗っている間に、オペラグラスで別のモーター・ボートに載る女を見た。

あの女は円い風景の中にちよつと顔を横にしたまま、誰かの話を聞いてみると見え、時々微笑を漏らしてゐた。頤の四角い彼女の顔は唯目の大きいと言ふ以外に格別美しいとは思はれなかつた。が、彼女の前髪や薄い黄色の夏衣裳の川風に波を打つてゐるのは遠目にも綺麗に違ひなかつた。

これは玉蘭が初めて登場する場面である。日本人旅行者としての「僕」は譚永年の通訳がなければ、コミュニケーションも取れない。通訳がなければ、中国人と会話出来ない「唾の旅行者」の「僕」にとつて、自分の目で見るといふ行為は、湖南を認識する方法となる。「僕」の目はカメラの機能を果たし、玉蘭をクローズアップしている。退屈な環境の中には、明るく見える玉蘭は格別な存在だが、「僕」は玉蘭が「格別美しいとは思はれなかつた」ので、あまり玉蘭に興味を示さなかつた。続いて、「僕」が譚永年から聞いた土匪の黄六一の武勇談を見よう。

黄の平生密輸入者たちに黄老爺と呼ばれてゐた話、また湘潭の或商人たちから三千元を強奪した話、また腿に弾丸を受けた樊阿七と言ふ副頭目を肩に蘆林潭を泳ぎ越した話、又岳州の或山道に十二人の歩兵を射倒した話、——譚は殆ど黄六一を崇拜してゐるのかと思ふ位、熱心にそんな話を話しつづけた。

譚永年から黄六一の話聞かせ、「僕」は「血の匂ひよりもロマンチックな色彩に富んだのだつた」と黄六一の

話を評価した。テキストには土匪黄六一を、俠客のようで弱きを助け、強きを挫く、金持ちの地主と資本家を強奪し、貧乏人を救済するといった行動を出し、自由に江湖を渡り歩き、無私無畏、金銭を蔑視するという儒教倫理における典型的な英雄像のイメージを持つ人物として語っている。中国古典書籍『水滸伝』『三国志演義』に描いた豪傑の世界に親しむ「僕」は、土匪の話をロマンチックな話だと捉えていると伺える。黄六一のロマンチックな色彩に富んだ話を聞いてから、「ぢやあの女は芸者か何かい？」と譚永年に玉蘭のことを聞き、初めて黄六一の情婦としての玉蘭に興味を覚えてきた。玉蘭はロマンチックの色彩に富んだ黄六一と関わりがあるからこそ、「僕」は玉蘭に興味を覚えてきたと考えられる。

そこへ闊達にはひつて来たのは細い金縁の眼鏡をかけた、血色の好い丸顔の芸者だった。彼女は白い夏衣裳にダイヤモンドを幾つも輝かせてゐた。のみならずテニスか水泳かの選手らしい体格も具へてゐた。僕はかう言ふ彼女の姿に美醜や好悪を感じずるよりも妙に痛切な矛盾を感じた。彼女は実際にこの部屋の空気と、——殊に鳥籠の中の栗鼠とは吊り合はない存在に違ひなかつた。

これは林大嬌が最初に登場した場面である。林大嬌の身なりを見よう。金縁の眼鏡、飾りのダイヤモンドなどから見れば、林大嬌も中国の近代化の流れに巻き込まれてみると読み取れる。当時の中国では、眼鏡を掛けるということは近代的であり、文化人の象徴でもある。金縁の眼鏡を掛けるということは、古典的なイメージを持つ扇をかざすということと対照的であり、林大嬌が持つ近代的なイメージを浮き彫りにする。「子供らしい」弱々しい体格とテニスか水泳かの選手らしい体格とを対照させ、林大嬌の中国古典的な審美観と当てはまらないイメージを強める。更に、金持ちの子で、社会的に既得権の上位に立つ譚永年は、日本人の友人を連れていく妓館を下品な妓館だとは思わない。妓館で「芸者は（中略）丁度胡弓の音に吊られるやうに甲高い唄をうたひ出し」た。

この妓館の芸者たちは、京調や西皮調を歌え、楽器にも精通する、かなりの芸を持ち、芸術教養を持つ人だと思われる。それらの芸者たちは客とそれなりの会話ができるから、譚永年みたいな高等教育を受けて留学経験を持つ人を相手にしても、相当話に乗ると考えられる。林大嬌もその中の一人として造形されている。

「僕」が林大嬌、含芳と玉蘭を描いたが、三人の中では、林大嬌だけが姓氏をつけ、玉蘭と含芳の方は姓氏がついていないことを見ておきたい。中国伝統的な思想では、姓氏は血縁に基づき、生まれてきて世襲の職業や政治的地位、家柄を示すものとして、一家族に対して、極めて重要なものである。中国伝統的な家父長制の表しでもある。個人に対して、自分自身が何処に属しているのか、何処に置かれているのか、自分自身のアイデンティティを確立して自分を位置付ける際に、姓氏は重要な働きを果たしている。やむを得ず芸者であっても、自分が属する家族の名誉を守るために、自分の名字を隠して「花名」や「芸名」などをつけるのも決まりである。「芸名」をつけるのは、自分自身を家族と切り離すという意味も含む。深く言えば、自分の父親や家族を侮辱しないように、自分の姓氏を捨てしまう。これも封建的家父長制の下で生まれ、定着してきた風習である。

中国では、辛亥革命（一九一一年）から、新文化運動（一九一七年）、五四運動（一九一九年）や中国共産党の成立（一九二一年）など、様々な救国運動が行われた。これらの運動は思想の面から、知識人をはじめ、普通の女性を含め、当時の中国人に大きな影響を与えた。当時の人々の思想も、伝統的な儒教思想から、西洋の「自由」「平等」「民権」などに転換しようとしていたが故に、女性解放運動も一九一九年以降に行われ始め、新文化運動の機関誌「新青年」は封建的な家族制度、儒教制度の下で、最大の抑圧を受ける女性を解放しようとして、女性の自立を様々な方向を論じていた。近代中国の女性も近代的な人間になろうとしていたのである。近代中国でプロレタリアートは激しい社会的な矛盾を抱えているため、階級社会では、彼等には革命に転化するエネルギーが高いと考えられる。プロレタリアートに革命、自由、平等、科学などの思想を教え込むと、彼らは新しい物を受け入れるのは、よほど速いのである。林大嬌もその中の一人かもしれない。林大嬌が「林」という姓氏をつけた

ままで、芸者をやることから何うと、林大嬌には意識的に家父長制へ反抗し、儒教倫理の抑圧から脱出しようとする反抗的な性格を持っているのである。

次に妓館で林大嬌の言動を考察しよう。妓館の様子は次のように描かれている。

この部屋の天井の隅には針金細工の鳥籠が一つ、硝子窓の側にぶら下げてあつた。その又籠の中には栗鼠が二匹、全然何の音も立てずに止まり木を上つたり下つたりしてゐた。それは窓や戸口に下げた、赤い更紗の布と一しよに珍しい見ものに違ひなかつた。しかし少なくとも僕の目には気味の悪い見ものにも違ひなかつた。

籠の中に閉じられてゐる栗鼠を見よう。先述したように、「僕」は林大嬌を「実際にこの部屋の空気と、——殊に鳥籠の中の栗鼠とは吊り合はない存在」だと捉えている。芥川の「動物園」には、「その枝の上に蹲つた、可笑しい程悲しいお前の目つき」と憐れむイメージで、栗鼠を描いている。林大嬌は「鳥籠の中の栗鼠とは吊り合はない」存在のようなものだとして設定されれば、鳥籠の中の栗鼠と吊りあう存在は誰なのであろうか

妓館で「僕」は譚の通訳を通して、含芳へ話し掛ける場面に、次の一節がある。

譚はかう言ふ通訳をした後、もう一度含芳へ話しかけた。が、彼女は頬笑んだきり、子供のやうにいよいよやをしてゐた。

「ふん、どうしても白状しない。誰の出迎ひに行つたと尋ねてゐるんだが。……」

すると突然林大嬌は持つてゐる巻煙草に含芳を指さし、嘲るやうに何か言ひ放つた。含芳は確かにはつとしたりと見え、いきなり僕の膝を抑へるやうにした。しかし、やつと微笑したと思ふと、すぐに又一こと言ひ返



した。僕は勿論この芝居に、——或はこの芝居のかけになった、存外深いらしい彼等の敵意に好奇心を感じずに見られなかつた。

妓館の部屋の装飾は「上海や漢口の妓館にあるのと殆ど変はりは見えなかつた」が、「僕の目には気味の悪いものが一つ挙げられる。それは赤い更紗の布を下げた、「硝子窓の側にぶら下げてあつた」籠の中にいる二匹の栗鼠のことである。部屋に飾られる栗鼠の籠は妓館という閉された空間を象徴するものだとするれば、二匹の栗鼠に託して何を語ろうとしているのかという疑問が生まれる。右の引用文を読むと、林大嬌が「嘲るやうに何か言ひ放」ちながら、「持つてゐる巻煙草に含芳を指さし」たに対して、含芳は「確かにはつと」し、「いきなり僕の膝を抑へるやうにし」たという表象に含む「敵意」が「僕」に感じ取られた。林大嬌と含芳との間に「敵意」が存在するとしたら、林大嬌は「鳥籠の中の栗鼠とは吊り合はない」存在である以上、彼女の対立面に位置するやうに見える含芳は鳥籠の中の栗鼠と吊りあう存在だと考えられる。妓館で玉蘭と再び会う時、「僕」は「彼女の笑ふ度にエナメルのような歯の光るのは見事だつた」と思いながら、「その歯並みにおのづから栗鼠を思ひ出し」た。つまり、玉蘭も鳥籠の中の栗鼠と吊りあう存在である。さらに、玉蘭は「鴛婦と立ち話をした後、含芳の隣に腰を下ろし」た。玉蘭と含芳と一緒に座っているという位置関係から推測すると、含芳と玉蘭は何か同じものを持つていのである。明確に言えば、テキストの中では、玉蘭と含芳と対照させながら、彼女たちと違う存在として、林大嬌という芸者を造形しているのではないだろうか。

妓館でのクライマックスのシーンは「悪党」の頭目と決めつけられ、処刑された黄六一の情婦玉蘭が、黄の血に染み込まれたビスケットを味わう場面である。

譚はビスケットを折つて見せた。ビスケットは折り口も同じ色だつた。(中略)

僕は勿論首を振った。譚は大声に笑つてから、今度は隣の林大嬌へビスケットの一片を進めようとした。林大嬌はちよつと顔をしかめ、斜めに彼の手を押し戻した。彼は同じ常談を何人かの芸者と繰り返した。が、そのうちにいつの間にか、やはり愛想の好い顔をしたまま、身動きもしない玉蘭の前へ褐色の一片を突きつけてゐた。

僕はちよつとそのビスケットの匂だけ嗅いで見たい誘惑を感じた。(中略)

すると玉蘭は譚の顔を見つめ、二こと三ことと問答をした。それからビスケットを受け取った後、(中略)

「(略) わたしは喜んでわたしの愛する……黄老爺の血を味ひます。……」(略)

玉蘭は譚の言葉の中にいつかも美しい齒にビスケットの一片を噛みはじめてゐる。……

芥川の「手帳 六」の内容(前述した「手帳 六」を参照)によると、「僕」は中国で広げられた「人血の饅頭」を食べると無病息災という迷信を知つていたと分かる。「匂いだけ嗅いで見たい誘惑を感じる」程度のビスケットは「僕」にとつて、エキゾチシズム的な興味の対象である。日本という視点を持つ「僕」は玉蘭が血のビスケットを食べる場面から、『桃花扇』の李香君が床に倒れた時、鮮血が扇に散り、友人が筆を加えて桃花に仕上げたことと同じく、中国古典的なロマンチックを感じたと考えられる。つまり、「僕」は玉蘭に興味を覚えるのは、玉蘭がロマンチックな色彩に富んだ黄六一と関わりがありながら、血のビスケットを食べるというロマンチックな行動を取ったからであると読み取れるだろう。このところについて、たくさんの論者は、ビスケットを口にする玉蘭の言葉「私は喜んでわたしの愛する……黄老爺の血を味わひます。……」と聞いた「僕」は、意地を張つた玉蘭を「負けぬ気強い、情熱に富んだ」女性として造形していると主張する(一「湖南の扇」をめぐる先行研究」を参照)。

しかし、林大嬌に黄六一の血が染み込んだビスケットを勧める場面を見ると、林大嬌は「ちよつと顔をしかめ、

斜めに彼の手を押し戻した」といった行動を取った。当時、「無病息災」と言われ、死人の血が染み込んだビスケットを食べることが出来る女性はいたと考えられるが、林大嬌は血が染み込んだビスケットを食べることを拒絶した。前文で分析したように、当時の中国で、女性解放運動も一九一九年以降に行われ始め、封建的な家族制度、儒教制度の下から解放され、近代中国の女性も近代的な人間になろうとしていたのである。黄六一の血が染み込んだビスケットを勧められる際に、食べれば無病息災と言われても、拒否の動作を取った林大嬌は、彼女はすでに迷信じみたことを信じていないと読み取れるだろう。言い換えれば、林大嬌には近代的な科学などのものを受け入れようとしている内面があると考えられる。

#### 四 「僕」が林大嬌に興味を示さない理由

当時西洋と日本帝国に侵略されていた病的で、社会情勢も複雑で、激しく変動していく近代中国を生きている女性は、新しいタイプの女性になる。激動の時代を生き、既成の社会の枠組みに反抗しようとする中国女性にこそ、芥川は興味を覚えるはずだと思われる。前文の分析により、芥川は意図的に中国古典的なイメージを失い、科学などの新たな思想を受け入れ、反抗的性格を持つ林大嬌を造形しているが、なぜ「僕」は林大嬌に興味を示さないのだろうか。

一つの推測が挙げられる。中国旅行を終えた約四後、作者芥川はもつと理智的且つ冷靜的になった。中国を旅した時の自分自身を見つめ、「支那趣味」ばかりを求め、侵略されつつあった近代的な中国を理解しようとしないうちに、受け入れようとしないうち拒否する態度を取った自分自身を、「僕」という日本人旅行者に織り込み、「僕」の作り上げた林大嬌の女性像を通じて、表わしているのではないだろうか。

まず、前述の分析により、含芳における中国古典的なイメージ、玉蘭におけるロマンチックな色彩と比べれば、

林大嬌にはすでに中国古典的なイメージを失い、科学などの新たな思想を受け入れ、反抗的性格を持つというイメージがあるため、林大嬌は芥川が中国で求めようとする「支那趣味」と当てはまらない存在である。本研究の第二章「支那遊記」における近代中国の女性像」の中に指摘した通り、近代中国に現れた新しいタイプの女性に好感を示すよりも、中国旅行中の芥川は、現実の中国を目撃した後、近代中国に対する嫌悪感が生じ、冷ややかな視線で近代中国の女性を見つめるようになった。

「支那遊記」に、芥川は帝国主義（侵略者）と、儒教倫理における家父長制と、階級といった三つの権威に支配される性商品としての女性たちを「俗臭紛紛」たる女として描き、新しいタイプの女性たちにおける新しさを危険な「西洋カブレ」だと捉えていた。中国旅行を終えた約四年後、芥川は理智的且つ冷靜的に中国旅行中の見聞を見直す際に、近代中国女性をも見なおしたと考えられる。帝国主義（侵略者）と、儒教倫理における家父長制と、階級といった三つの権威に支配される性商品としての女性たちこそが、中国社会革命に転換するエネルギーを持ち、中国革命の協力者になれる存在である。新しいタイプの女性における危険な「西洋カブレ」の裏に、新思想を受け入れようとするという新しいタイプの女性の内面をも潜んでいる。これは「湖南の扇」における近代中国女性像が変化した理由であろうか。

日本人旅行者の「私」は、「支那遊記」の中で自分自身の近代中国女性に対する嫌悪感を語っていた。約四年半後、日本人旅行者の「僕」は、近代中国女性に対する嫌悪感ではなく、「湖南の扇」の中で近代中国女性から感じた反抗的イメージを語っている。当時の中国で、中華民国政府は清末で行われた「洋務運動」の指導思想を継ぎ、精神的なものは中国伝統的なものを用い、物質的なものや技術的なものを西洋のものを導入するという「中体西用」政策を推し進めるのである。「新文化運動」で、雑誌や新聞を武器として、「全面的に西洋化」を宣伝した。西洋化は当時の中国の大流行になってしまふ。何から何まで、洋風化しようとしている。林大嬌はそのような激動な時代を生きる女性なのである。反抗的な性格を持ち、新しい思想を受け入れようとする林大嬌は、半植民地

化されていく社会環境に置かれ、中国古典的なイメージが失い、西洋カブレのイメージが浮き上がる。「支那趣味」を求める「僕」が林に興味を示さないのも、無理はないだろう。

テキストの表に、含芳と玉蘭のような女性が輝いているが、むしろ、平凡でほぼ「僕」に無視される林大嬌のほうに、芥川が作品の真のモチーフを託しているのではないだろうか。作者の芥川は、含芳の中国古典的なイメージ、玉蘭のロマンチックな色彩と比べれば、「僕」が林大嬌のような中国古典的なイメージを失い、科学などの新たな思想を受け入れ、反抗的性情を持つというイメージがある女性に興味を示さないことで、芥川自身だと思わせる「僕」を「支那趣味」ばかりを求める人物として造形していると読み取れる。このような「僕」は、中国旅行中の芥川龍之介自身とかなり重ねるところがあるから、「湖南の扇」の中で、芥川は「僕」の新しいタイプの女性である林大嬌に興味を示さないことを通じて、中国旅行中の「支那趣味」ばかりを求め、侵略されつつあった近代的な中国を理解しようもしない、受け入れようもしないという拒否する態度を取った自分の内面を讀者に告白しているのではないだろうか。

作品の末尾に「僕の滞在費は——僕は未だに覚えてゐる、日本の金に換算すると、丁度十二円五十銭だった。」という文において、林大嬌から感じた「痛切な矛盾」が何か、含芳が伏せ字に書かれた長沙の役者とどんな関係を持つか、玉蘭がなぜ譚に苦しめられるかなどのことを、「僕」は一切忘れ、一切追究してないと作品を収める。この作品が中国視察後四年半あまり経て創作されたという事実を考慮すれば、この時期の芥川がもつと理智的且つ冷静に、中国を旅した時の自分を見つめ、当時の「支那趣味」ばかりを求め、侵略されつつあった近代的な中国を理解しようもしない、受け入れようもしないという拒否する態度を取った自分自身を「僕」という日本人旅行者に織り込み、「僕」の作り上げた林の人物像を通じて表わしているという「湖南の扇」の新しい読みに辿り着ける。「湖南の扇」も芥川的な精密的な計算に満ちた小説だと考えられる。

芥川は中国旅行前にロマンチズム、エキゾチズムに溢れる「宋金花」の物語に熱中したが、大阪毎日新聞

社特派員として中国を体験し初めて、近代中国を目撃し、そして、思いもよらぬ大いに衝撃を受けていた。アヘン戦争から帝国列強の侵略のため、半植民地になり、亡国の危機にさらされた中国民衆の激しい抵抗の姿を読み取った彼は、帰国後「支那趣味」作品を書かなくなり、四年以上経ってからこの旅行に取材した小説「湖南の扇」を創作した。「追憶癖」のある芥川は、作品執筆時点の社会状況に刺激され、旅行中見聞したことを追想し、現地で書いたメモなどを目を通し、特に湖南長沙学校の女子学生の日貨ボイコットの激しさおよび「存外烈しい排日的空気」などということを追想しながら、「湖南の扇」を創作したと考えられる。「もし『桃花扇伝奇』の香君に至つては、独り秦淮の妓家と云はず、四州を遍歴するも、恐らくは一人もあらざるべし」（『江南游記』の「二十八 南京（中）」）、「前髪を垂れた小妓が一人、桃色の扇をかざしながら、月湖に面した欄干の前に曇天の水を眺めてゐる」（『雑信一束』の「四 古琴台」などという思いも、記憶の封印から目覚め、芥川の心の底に動いていたと推測できるだろう。

注

- (1) 芥川龍之介等「新潮合評会 第三十一回（新年の創作評）」（『新潮』、一九二六年二月号）。
- (2) 注（1）に同じ。
- (3) 宇野浩二「年頭月評」（『報知新聞』、一九二六年一月一三日）。

- (4) 田山花袋「一月の小説(九)」(『読売新聞』、一九二六年一月二五日)。
- (5) 吉田精一『芥川龍之介』(三省堂、一九四二年二月)。
- (6) 神田由美子「芥川龍之介『湖南の扇』」(『国文学解釈と鑑賞』第六二卷第一二号〈特集Ⅱ続・日本人見た異国・異国人——明治・大正期——(大正時代の異国・異国人論)〉、一九九七年二月)。
- (7) 『小説月報』は中国の月刊文学雑誌である。一九一〇年上海で創刊され、一九二一年以降、沈雁氷、茅盾の編集によつて文学研究会の機関誌となり、当時の新文学運動に大きな影響を与えた。『新青年』と共に、二十世紀初頭の中国でもっとも影響力が強い進歩的な雑誌である。
- (8) 夏丐尊は中国近代著名な学者で、芥川龍之介の「支那遊記」「南京の基督」「湖南の扇」等の作品を中国語に翻訳した。
- (9) 夏丐尊「芥川龍之介の中国観」(『小説月報』、一九二六年四月号)。
- (10) 姚紅「『湖南の扇』論——情熱的な中国女性——」(筑波大学比較・理論文学会刊『文学研究論文集』第二七号、二〇〇九年二月)。
- (11) 溝部優実子は、テキストの執筆された一九二六年前後の時代状況と照らし合わせて、当時湖南を根拠地していた中国共産党との関わりに注目し、土匪の単なる無頼な武装集団ではなく、反体制的な色彩を捉えることで、時には立場によつて、「土匪」は革命家とも捉えられて、「湖南の扇」には当時の中華民国の社会姿勢にかかわる深層が抱えこまれていると指摘する。(溝部優実子「『湖南の扇』——含芳の「扇」を糸口として——」、日本女子大学文学部紀要、第四八号、一九九八年)。劉耕毓は中国革命との関連事件を考察しながら、この作品の裏には興漢会の結成という大きな歴史的文脈が潜在していると指摘し、作中人物である譚永年が譚嗣同と畢永年を組み合わせた名前に由来すると主張し、譚嗣同と畢永年に関連する事を追究し、芥川はその名前を通じて、作品の表層には必ずしも明記されていない革命への遺志を受け継ぎ、革命意志を持つ人物として彼を登

場させ、譚の最後には「僕の見送りには立たなかつた」という矛盾は芥川の中日関係への思索を含んでいると結論付ける。(劉耕毓「『湖南の扇』論——中国革命との関連をめぐって——」、九州大学日本語学会刊『九州日文』第一五号、二〇一〇年三月)。姚紅は中国社会史研究と史資料を踏査し、辛亥革命以降の中国では妓女が積極的に革命党に協力し、革命活動に身を投じた事を証明した上に、革命情熱に富んだ玉蘭と含芳の人物造形を解明する。(注(10)に同じ)。孔月は人血に浸ったビスケットをめぐる出来事を分析してから、譚のような帝国日本に迎合せざる得ない体制側と、黄六一と「××××という長沙の役者」という排日を標榜する反体制側の戦いの時代情勢が、血のビスケットの事件によって表象されると結論付けた。(孔月「僕の〈支那趣味〉装置——『湖南の扇』論」、『芥川龍之介——中国題材作品と病——』学術出版社、二〇一二年九月)。

(12) 注(10)に同じ。

(13) 紅野敏郎『近代日本文学誌——本・人・出版社——』(早稲田大学出版部、一九八八年十月)。

(14) 関口安義『特派員芥川龍之介——中国で何を視たのか——』(毎日新聞社、一九九七年二月)。

(15) 劉建輝『魔都上海——日本知識人の「近代」体験——』(講談社、二〇〇〇年六月)。

(16) 『桃花扇』は中国清代の長編戯曲である。孔尚任作。明王朝の滅亡と南京の盛衰という激動する時代を背景に、名士の候方城と南京名妓の李香君との悲恋を描いたものである。劇名は金持ちの身請けを拒絶した李香君が床に倒れた時、鮮血が扇に散り、友人が筆を加えて、桃花に仕上げたのに由来するのである。



#### 第四章 芥川龍之介における近代中国女性像の変容

本研究では、芥川龍之介における近代中国女性へのまなざしを探究するために、彼が中国旅行前後に創作した近代中国を舞台とし、近代中国女性を描いている小説「南京の基督」、「湖南の扇」と紀行文の「支那遊記」を取り上げた。

中国の地にまだ踏み込んでいない作者芥川は、「南京の基督」において、善良且つ従順で人生の方向性に個人としての深遠な反逆精神が欠けている中国近代以前の文学に描かれる中国女性のステレオタイプのな宋金花を、儒教倫理に強く縛られ、悪化していく社会状況に置いて造形している。中国旅行後、芥川は「支那遊記」において、帝国主義（侵略者）と、儒教倫理における家父長制と、階級との三つの権威に支配される近代中国の女性像と、自己覚醒し、民族的、家父長制的、階級的支配に積極的に反抗しようとする女性の姿を書き留めている。しかし、近代中国の現状に失望を極めた芥川は、冷ややかな視線で新型の中国女性を見つめた。中国旅行を終えた約四年半後、「湖南の扇」において、林大嬌のような中国古典的なイメージを失い、科学などの新たな思想を受け入れ、反抗的性格を持つというイメージがある女性に興味を示さないことで、芥川自身だと思わせる「僕」を「支那趣味」ばかりを求める人物として造形し、中国旅行中の「支那趣味」ばかりを求め、侵略されつつあった近代的な中国を理解しようともしない、受け入れようともしないという拒否する態度を取った自分の内面を読者に告白している。芥川は新しいタイプの近代中国女性への嫌悪感を反省し、彼女たちを国民の情熱を呈する人物として造形するに転換したと考えられる。続いては、その転換を遂げる誘因は何だろうかを考察してみたい。

まず、中国旅行が作家としての芥川にどんな影響をもたらしたのかを検討してみたい。中国滞在中の芥川は、何人かの中国人の政治家や文人に面会していた。なかには清朝末期の古典学者・革命家章炳麟、清朝の遺臣でのち満州国の國務総理となった鄭孝胥、「若き支那」を代表する社会主義者の李仁傑、中国近代文学革命のリーダー

胡適などがいる。中国の知識人たちの会見や、強列な排日的雰囲気と革命的な雰囲気を目の当たりにしたこと、中国の厳しく生き生きした現実的側面を、鋭敏な感覚の持ち主である芥川に肌で感じ取らせ、広い視野で世界と日本を見つめる現実感覚や、社会的関心を抱かせるなど、その精神生活にも極めて大きな影響を与えた。一九二二年一月に発表された「將軍」は帰国後の早い時期に書かれた伏せ字がかなり多い作品である。この作品は、日露戦争の最激戦地の決死隊白襷隊に選ばれ、いよいよ出発する兵士たちの会場面から始まる。作中に、兵士たちの多くは、恐怖や絶望のなかで死ぬか、発狂する。また日常生活では善人である將軍（乃木希典將軍）が、戦場では残虐な偏執狂者に一変して、愉快そうに中国人の殺戮を命じる。芥川はこの作品を通じて、兵士の立場に立つて戦争の不条理を訴えている。ここで中国人の殺戮を躊躇う下級兵士の姿も描かれており、「反戦小説」的な色彩も読み取れる。

上海で章炳麟と会見した時、二人は中国の政治・社会問題や日中問題を論じ合った。三年後、芥川はその時の訪問を思い出し、「僻見」（一九二四年）という文章に、章炳麟の当時の言葉「予の最も嫌悪する日本人は鬼が島を征伐した桃太郎である。桃太郎を愛する日本国民に多少の反感を抱かざるを得ない」を披露し、また「先生はまことに賢人である」、「この先生の一矢はあらゆる日本通の雄弁よりもはるかに真理を含んでゐる」と述べ、章炳麟の桃太郎侵略者説に賛同の意を表していた。そのうえ、帰国後、芥川は当時日本で発生したプロレタリア文学運動の影響を受け、時代の転換の中で、社会主義とプロレタリア文学を理解しようとして、社会主義文献を系統的に読み始め、社会主義とプロレタリア文学に対して独自の観点を提起し、彼の中国観や日本帝国主義への考え方も変化した。プロレタリア文学の影響を受け、章炳麟との会談から得たヒントを活かし「桃太郎」（一九二四年）を創作した。作中に、何の罪もない鬼たちの平和の暮らしを何の理由もなく壊した悪者で、残虐非道な侵略者として桃太郎を描いている。日本軍国主義の中国侵略を連想させるテーマには、紛れもなく彼の中国体験が投影されているだろう。本研究の第二章で言及した「侏儒の言葉」（一九二三年一月から『文芸春秋』に連載）の「支

那」に、芥川は「螢の幼虫は蝸牛を食ふ時には全然蝸牛を殺してはしまはぬ。いつも新らしい肉を食ふ為に蝸牛を麻痺させてしまふだけである。我日本帝国を始め、列強の支那に対する態度は、畢竟この蝸牛に対する螢の態度と選ぶ所はない。」と、日本の対中政策に批判的な姿勢を取っているののように思える表現が見られる。

つまり、芥川自身は帝国主義に侵略されつつあった中国で、高まる独立運動の気運に触れ、日本を新たに見直そうとしていたに違いない。軍閥の割拠する動乱の中国、民族運動高揚の時期の中国を旅したことは、芥川にさまざまな影響を与えたと同時に、彼の中国および時代認識をも新たにさせたのである。これは「湖南の扇」に、芥川が描いている近代中国女性像の変貌のもっとも基本的な理由だと考えられる。

視察員として中国を旅行した時期の芥川より、視察員の仕事を終え帰国後、約四年後の芥川は、もっと理知的且つ冷静な目で、近代中国社会を見つめることができるだろう。では、その時芥川はどんな生活を送っていたのだろうか。一九二五年一月一日発行された『文章倶楽部』の第一〇年第一号に、芥川は「現代十作家の生活振り」の中で、「新聞を読むのは、飯を喰ひながらである。まづ読み始めるのは、海外電報で、それも近頃一層興味を持つてゐるのは支那動乱の電報である」と述べた。一九二五年九月の「中央公論」では、その時点の「支那動乱」について、「支那対外運動の現在及び将来に対する観測」という特集が企画され、「支那の対外運動とその立体的考察」、「支那の国権運動に対する英米の政策」、「支那問題の重点」などという三つの論文が載っている。これらの論文には、馮玉祥、段祺瑞、張作霖をはじめとする軍閥や陳独秀や李大釗といった社会主義者たちを論じた。一九二四年という時点で、近代中国では軍閥内戦が続いていた。一九二四年一〇月、直隸派の馮玉祥がクーデターをおこして、同派の大統領曹錕を囚禁し、廢皇帝溥儀を紫禁城から追放する。一月には国民軍を称し、孫文に対して安徽派の段祺瑞、奉天派の張作霖とともに統一を話しあおうと呼びかけた。孫文はこれに応じるが、出発の前に一一月一〇日、声明を發し、各民衆団体の代表による国民會議予備会および国民會議の開催を提唱し、これによって中国の統一と建設をはかり、不平等条約を廢止しようと述べて、これより国民革命の時代に入ると

宣言した。芥川が目にした「支那動乱」はこの国民会議運動だと思われる。この「支那動乱」の中では、中国女性も積極的に運動に身を投げた。『二〇世紀中国女性史』には、次のような一節がある。<sup>33</sup>

一九二四年の一月一七日、向警予ら上海国民党婦女部は上海に立ちよった孫文に国民会議への女性団体の参加の必要性を訴えた。また全国の女性団体に宛てて上海女界国民会議促成会準備会名義で打電し、国民会議の速やかな開催と女性の参加の実現をめざすと同時に、各地で女界国民会議促成会を組織し、その代表が集まって全国女界国民会議を結成し、全国的な女性運動のネットワークを創建することをよびかけた。

右の引用文から、近代中国女性たちの積極的に革命運動に協力しあっている姿を読み取れるだろう。新聞を読む芥川は、当時の日本マスコミメディアから中国女性が革命運動に参加することとの関連記事を読んだという可能性も高い。当時の日本マスコミメディアに報道された近代中国女性革命を見よう。一例を挙げるならば、『読売新聞』に掲載された清水安三の「北京より」においては、一九二三年四月一六日から一八日にかけて、「婦人革命」という副題で中国女性の革命活動が紹介された。一七日の「婦人革命(二)」では、次のように書かれている。

第二次革命（引用者注…一九一一年の辛亥革命後、臨時大統領に就任した袁世凱は孫文を代表とした国民党の存在が自分の権利を脅かすものと考え、国民党の代表者宋教仁を上海駅で暗殺し、国会議員に務める国民党員を罷免した。追い詰められた国民党は七月に第二革命を起こしたが、袁世凱に鎮圧され、孫文らの国民党員は海外に逃亡し、第二革命が失敗に終わった。一〇月には袁世凱は国民党の解散を命じ、独裁体制を固めた。）の前後再び婦女運動家蹶起して、民軍聲援の為に奮闘した。（中略）唐群英の妹慕英なるものもまた女侠団を組織して、長江方面に出没し民軍の為に一臂の労をしたはずである。要するに第二革命における婦

人の活動は、刺客として東奔西走せしに止まり、革命成るに及んでは何れも杳として其の消息を洩らさぬ。

近代中国女性革命運動の蜂起と日本メディアがそれについての報道は芥川龍之介に何か刺激を与えたかもしれない。このような新聞記事を読んだとしたら、芥川の中国女性観も変わると考えられる。

更に、一九二六年という時点で、先祖代々漢学を好む医者の子に生まれ、「田園の憂鬱」を収めた『病める薔薇』で大正文壇に華々しくデビューした佐藤春夫は、小説「女誠扇奇談」（一九二五年五月『女性』）などで日本の植民地支配への批判を語る。佐藤春夫は一九二〇六月から同年一〇月まで台湾および福建にかけ、後中国や台湾を舞台とした作品を多く残した。「女誠扇奇談」は日本統治下の台湾を舞台にしている異国趣味豊かな怪談短編である。中国旅行後、芥川の作品には日本帝国の植民地支配へ批判も見られる。同時代の作家の影響を受けながら、芥川が「湖南の扇」の女性像を拵えたとも考えられる。

江口渙の『わが文学半生記』<sup>33</sup>の「その頃の芥川龍之介」では、芥川の長沙の女子学生の排日運動の激しさに驚異を覚え、深い感慨をもったエピソードが語られている。

女学生たちは日本が帝国主義的侵略をやめるまでは断じてこの運動はやめないと決意と闘志のはげしさを実際に見たとき、芥川はもう少して涙が出そうになるほどの感動に打たれた、と語っていた。「中国人という民族は全くたいした民族だね。いまに見たまえ。いまに、君。中国はたいした国になるよ。」と感慨ぶかい表情で語った。

右の引用文を読めば、激動の時代で生きている中国女性から反抗精神やエネルギーを読み取った後、芥川は異様なショックを受けたと分かるだろう。中国旅行中エリートの知識人との対談、日本メディアの中国「婦人革命」

についての報道、同時代の佐藤春夫などの作家が日本植民地支配への批判などといったことの影響を受けながら、旅行中に書いた手帳を味わい、旅行中の見聞や出来事を追想し、「湖南の扇」を創作したのではないだろうか。そのため、芥川は新しいタイプの近代中国女性への嫌悪感を反省し、彼女たちを国民の情熱を呈する人物として造形するに転換したと考えられる。

一方、一九二八年、横光利一は初めて上海を訪れ、一ヶ月ほど滞在した。帰国後、そこで見聞したことをもとにして、彼の代表作と言われる最初の長編小説『上海』（一九二八年一月）を発表した。後年のエッセイで、横光利一は上海行のきっかけを、「私に上海を見て来いと云った人は芥川龍之介氏である。氏は亡くなられた年、君は上海を見ておかねばと云はれたのでその翌年上海に渡つてみた」と書き、芥川に示唆されて上海に行ったことを取り分け強調している。このようなエピソードから、近代中国の何かに引かれてずっと中国への関心を持つ芥川像が伺われるだろう。一方、一九二〇年七月から、一九二一年三月に中国へ出発するまでの約半年、舞台が中国であったり、中国人が登場したりする作品は、「杜子春」（一九二〇年七月）、「南京の基督」（一九二〇年七月）、「影」（一九二〇年九月）、「秋山図」（一九二一年一月）、「奇怪な再会」（一九二一年一月）、「アグニの神」（一九二一年一月）といった六つがある。中国旅行後、一九二一年九月から、一九二七年七月に自殺するまでの約六年間、中国を作品の舞台背景とし、中国人を主人公としている完成された作品は、紀行文「支那遊記」を除くと、「母」（一九二二年九月）、「第四の夫から」（一九二四年四月）、「馬の脚」（一九二五年一月）、「湖南の扇」（一九二六年一月）といった四つしかない。旅行後、芥川は「ロマンティズムよ、さやうならである」（「支那遊記」とロマンチズムと決別のことばをはっきりと書き留めている。この四つの作品はいずれも芥川が創作した現代物である。芥川の健康上の問題はともかく、中国旅行後の芥川の心底では、おそらく近代の中国がもはやロマンチズムのものを支えることができなくなってしまう。芥川文学において、「南京の基督」に描かれている純粹な中国女性も見えなくなり、多様な近代中国の現実社会に生まれたさまざまな要素を含む立体的な女性が登場して

くる。

注

- (1) 張蕾『芥川龍之介と中国 受容と変容の軌跡』(国書刊行会、二〇〇〇年四月)。
- (2) 末次玲子『二〇世紀中国女性史』(青木書店、二〇〇九年五月)。
- (3) 江口渙『わが文学半生記』(講談社、一九九五年一月)。

おわりに

本研究では、芥川龍之介における近代中国女性へのまなざしを探究するために、彼が中国旅行前後に創作した近代中国を舞台とし、近代中国女性を描いている小説「南京の基督」、「湖南の扇」と紀行文の「支那遊記」を取り上げた。

中国の地にまだ足を踏み込んでいない作者芥川は、「南京の基督」において、善良且つ従順的で、人生の方向性に個人としての深遠な反逆精神が欠けている中国近代以前の文学に描かれる中国女性のステレオタイプのな宋金花を、儒教倫理に強く縛られ、悪化していく社会状況に置いて造形している。中国旅行後、芥川は「支那遊記」において、帝国主義(侵略者)と、儒教倫理における家父長制と、階級との三つの権威に支配される近代中国の女性像と、覚醒し、民族的、家父長制的、階級的支配に積極的に反抗しようとする女性の姿を書き留めている。

しかし、近代中国の現状に失望を極めた芥川は、冷ややかな視線で新型の中国女性を見つめた。中国旅行を終えた約四年半後、中国旅行中エリートの知識人との対談の影響、日本メディアの中国「婦人革命」についての報道、同時代の佐藤春夫などの作家が日本植民地支配への批判などといった誘因で、芥川は新しいタイプの近代中国女性への嫌悪感を反省し、彼女たちを国民の情熱を呈する人物として造形するに転換した。

本研究で取り上げた、芥川が中国旅行前後創作した「南京の基督」、「支那游記」、「湖南の扇」という三作はいずれも近代中国を生きている女性を描いている作品である。一方、芥川の中国旅行前後創作した中国女性が登場する作品には、「影」（一九二〇年九月）、「奇怪の再会」（一九二二年一月）、「第四の夫から」（一九二四年四月）などもある。「影」の中には、横浜で細君としての陳彩が登場し、「奇怪の再会」の中には、東京に生活している孟蕙蓮を描き出している。「第四の夫から」には、チベットのラッサに住んでいる「私」が書いた手紙の内容にラッサ人妻の人物像を潜ませている。芥川龍之介における近代中国女性像という視点から見れば、これらの作品の共通点は中国大陸の雰囲気と違う異郷（横浜、東京、チベット）に住んでいる女性を描写しているというところである。本研究と関連しながら考えると、芥川龍之介における異郷で生きている近代中国女性はどのような女性なのかも興味深い課題だと考えられる。

一行に五〇字 一頁に二〇行 一頁に一〇〇〇字

四〇〇字詰め原稿用紙 約一七八枚